新撰國語讀本 卷一

新訂

375.9
Sa19
資料室

41524
教科書文庫
4
810
41-1925
200030
1478

資料室

大正十四年一月二十二日
文部省檢定濟
中學校國語科用

新訂新撰國語讀本

文學博士佐々政一編
大町芳衛
武島又次郎
杉敏介
補修

株式會社明治書院

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 34503 圖書

新訂 新撰國語讀本 卷一目次

一 日本帝國……一
二 都の友へ……藤岡東圃……五
三 野に出でて（詩）……百田宗治……八
四 流のほとり上……石井重美……九
五 流のほとり下……一五
六 競馬……二〇
七 千本松原上……伊藤左千夫……二八
八 千本松原下……三五
九 愛犬上……二葉亭四迷……四〇
一〇 愛犬下……四六

一一 新緑の頃……近松秋江……五一
一二 錦の直垂 上……（日本史蹟）……六〇
一三 錦の直垂 下……六六
一四 湖山長者……五十嵐力……七一
一五 常山木の花……（藪柑子集）……七八
一六 夏の瑞西……黒板勝美……八四
一七 お祭（詩）……北原白秋……九一
一八 梟の聲の話……佐藤春夫……九八
一九 燕嶽の大觀 上……阿部次郎……一〇三
二〇 燕嶽の大觀 下……一〇八
二一 暑中休暇 上……（冬彦集）……一一四
二二 暑中休暇 下……一二〇

二三 地震の日……西條八十……一二四
二四 芙蓉の花（詩）……西條八十……一三〇
二五 リンカーンの少年時代 上……一三三
二六 リンカーンの少年時代 下……一三九
二七 故郷……德富蘆花……一四四
二八 生存競爭……丘淺次郎……一五〇
二九 伊能忠敬……幸田露伴……一五八
三〇 吾輩は猫である 上……夏目漱石……一六六
三一 吾輩は猫である 下……一七六

廣島大學圖書之印

新訂新撰國語讀本　卷一

一　日本帝國

日本帝國は、北は樺太から南は臺灣に至るまで、實に千二百餘里の長さに達して居る。隨つて寒暑の烈しい地もないではない。けれども、概して溫帶中和の氣候で、春や夏の候に氷に閉ざされる村もなく、秋や冬の節に汗に苦しむ町もない。春の花、秋の紅葉は言ふまでもなく、驟雨一過して滴らんばかりの明月懸り、

雪霽れて一望の銀世界、忽に茅屋も玉樓となる。四季とりどりの眺は、到る處これを恣にすることを得るのである。

その全土は總て島嶼若しくは半島であつて、山奥の肴屋にも新鮮な魚蝦があり、海邊の八百屋の店先にも今朝採つたばかりの松蕈が置かれてある。まして、その山川は頗る秀麗、その國土は頗る豐饒、天惠に富んで居ることは、世界のいづれの國に比しても決して劣ることはないのである。

わが國民はこの美しく豐かな國土に化せられて、

自然に淳良な風俗をなして居る。親はこの豐かな海山の産物をその子とともに味はうとし、子はこの美しい花・紅葉を父母とともに眺めようとする。親の慈愛も子の孝行も、兄弟・夫婦の情愛も、自らその間に養はれて、一家の睦じいことも亦全世界に比類を見ないのである。

この和氣靄然たる家から出た弟妹が、新しく別家を立てる場合には、兄の家を本家としてこれに敬事し、本家ではまた別家の人人を子弟としてこれを愛撫する。別家より更に別家を出し、その支流が漸次に

廣くなつて、遂に日本全國に及んだもの、これが我が日本國民である。

畏くも萬世一系の皇室は、日本全國民の總本家で、全國の何千何萬の家家は、相寄り相集まつて之を敬重し、之に奉仕し、ここに我が國家が成立つて居るのである。皇室の我等臣民に臨み給ふことは恰も慈親の赤子に於けるが如く、我等臣民の皇室を敬慕し奉ることも亦子の父母に對するが如きもののあるのは、畢竟これが爲である。

嗚呼、この帝國に生れ、この皇室を戴く我等臣民は、實に世界で最も幸福な國民と謂ふべきである。

二　都の友へ

拜啓。その後、御起居如何に候や。昨秋、一家擧つてこの地に移り候ひてより、往來する友もなく、日日里餘の道を學校に通ふのみにて候ひしが、この頃の春の景色に、自ら心も浮立ち候へば、學校の休日毎に、弟妹と共に田野の間を歩き廻り、例の水彩畫を試み居り候。そのうち最近のもの一枚、ここに說明を添へて御送り申上候。

小川の傍に高き松の聳えたる、その下の藁屋が僕等の住居に御座候。土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候。川の堤に様様の色うるはしきは、若草の中に菫・蒲公英・蓮華草などの咲亂れたるにて、その中には土筆も多く、妹などは、時時、前垂に一杯にして歸り候。堤のあなたに綠の色濃きは麥畠にて、まだ穗は出でず。菜の花は咲滿ちて、舞ひをる蝶を招きをり候。

透し見れば、野も山も一面に、火鉢の上に火氣の昇るが如く、ちらちらとものの動き候。これは

陽炎といふ由、晝には描け申さず候。雲雀も晝中には入らず、青天に一點の塵と見ゆるほど小さく、聲ばかり大きなるが、やがてふつと啼止みて、逆落しに麥畠の中に落ち候。山陰の藪には今も鶯の囀りをり候。この邊にては、夏の頃までも、かやうに啼續くる由に御座候。

この度はこれにて筆を止め候。都の友の消息もゆかしく、上野・日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下されたく候。草草。（藤岡東圃）

（一）東京市内の有名なる公園。

（二）東京市内の有名なる公園。

三　野に出でて

野に出でて歌はまし
あかつきの
野に出でて
歌はまし

目覺めたる
草の花とともに
曉を知る
水の流とともに

あはれ
輝きいづる太陽を
ことほぐために

曉の
野に出でて
歌はまし（百田宗治）

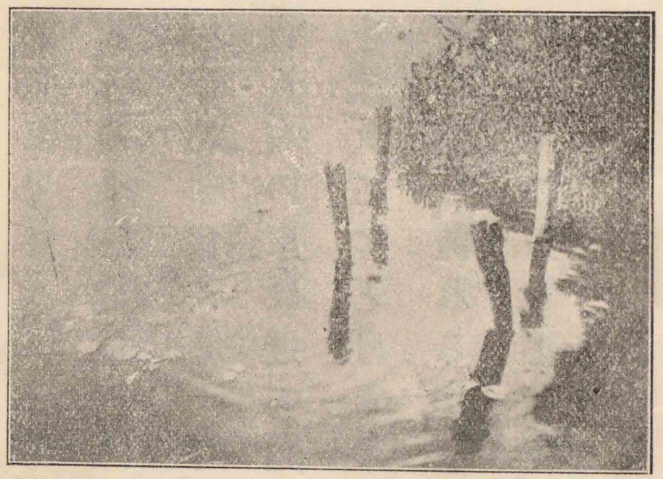
四　流のほとり上

裏の田圃に幅一間にも足らぬ小さな流がある。

或朝、早く、自分は、その流の縁にある半ば草に埋れた細い徑を、小鳥の樂しさうな啼聲を聞きながら歩いてゐた。兩岸には、色色の灌木や小笹の類が生えて居るが、それでも、ところどころに短い草ばかりの處もあつて、其處からは流の中の水がよく見えた。丁度、太陽が向うの雜木林の上に昇つて、流の表面へも柔かな光を投げてゐた。

ふと、自分は、流の底の黑味がかつた美しい砂の上に、幾つもの、玉のやうな圓い影が映つて動いてゐるのを見出した。その圓い影は辛うじて見分け得るくらゐの小さなのから、直徑一寸位の大きなのまである。影の縁は黃金色に明るく光り、中は暗い。それらの影は微かにふるへて、くるくると廻りながら流れて行く。右の岸に近い處を流れるのと、左の岸に近い處を流れるのとは、その廻り方が反對になつてゐる。又その影は、流れる途中で、段段と大きくなつたり小さくなつたりする。併し、どれもこれも、何時かは皆消え失せて了ふ。よく見ると、この圓い影は、流の表面に出來た春の水の靄の影であつた。

その邊にある草や、塵芥や、棒杭などのために、水がちよつと堰かれて亂れる時は、流の底にゆらゆらと搖れる焰のやうな紋樣や、或は鮮かな輪郭をもつた網目のやうな紋樣などが現れた。その外、平行線のやうなものや、波線狀のものや、雜多な形をしたものも現れた。肉眼には見えにくいやうな微細な水の皺でも、その影は明かに



水紋

底に映つて居るのだ。さうして其等の紋樣を掠めて、*ベニタナゴが時時およいでゐた。

其處から少し川下の方へ行くと、朽ちかけた板を集めて、無造作に拵へた一つの堰があつて、その透間から水が溢れ、小さな瀑を作つて居る處があつた。眞白な泡が深い處までも潛つて行つて、又競つて浮上る。泡は、大抵、堰に接した處へ一緒に群つて浮いて來るが、中には水の流れ工合で、その群よりは少し離れて浮くのもある。さういふのは、一つ一つの泡が舞狂ひながら上つて來るのがよく見える。愈、水面に近づ

*鮒に似て少しく小さき魚。

くと、それは喜び勇んで、踊り上るやうにして外へ出る。又この泡は、水中では宛ら水銀の玉のやうに白く輝いて居るが、水面に現れると、急に、ほのかに赤く光つたり、青く光つたり、紫色に光つたりする。

なほ、泡は外へ出ると、非常な勢で四方へ散亂しながら、ぴちぴちと音を立てて碎け、その小さな破片が薄い霧のやうになつて空中へ飛散する。心を虛しくして耳を澄ますと、その泡の碎ける微かな音が、一種の快い諧調を以て響いて來る。

五　流のほとり　下

又その朝、ちやうど日の出の頃、深く閉してゐた霧の爲に、しつとりと水氣を含んだ蜘蛛の巣が、流の岸の木の枝に、方方に掛つてゐるのを見た。小さいのも、大きいのも、木の枝のこみ合つたずつと奥の方にも、流の水のすぐ上にも、意外な處に意外に澤山あるのに驚いた。さうして其等の巣の中央には、どれにも一つ一つの蜘蛛が、靜な朝の空氣の中に、足をも動かさないで、ぢつとしてゐた。注意して視ると、自分の蹲つて居る近くの草の上にも、巣の形をしない蜘蛛の絲

が、彼方にも此方にも張られてあつた。瞳を凝すと、その絲には、*レンズの力を借らなければ十分には分らぬやうな、小さな水滴が無數に並列してゐて、光線の工合で、絲全體がこまかい虹のやうにまばゆく輝く。見る位置のちよつとの差で、その色は、赤から黃、黃から綠、綠から青、青から紫といふ樣に、色色に變つてゆく。又身動きもせずにぢつと眺めてゐても、何程かの空氣の微動があると見えて、その水滴の色は、始終ちらちらと光りながら變化する。

流に沿うた田圃の隅に、僅に二三尺四方の小さな

*Lens. 眼鏡玉。

水溜りの、水の干上つたのがあつた。しかも、たつた今干上つたばかりのやうで、まだ十分に乾き切らず、底には絹篩にかけたやうな細かな泥が、てらてらと光つて積つてゐた。この泥の表面には、初は別に何もないやうに思はれたが、腰をかがめて覗くと、其處に非常に澤山の、恐らくは何千本といふ細い細い線が、縱横に走つて居るのを發見した。

其等の線には、殆ど定規でも使つたやうに眞直になつて居るのもあれば、また如何にも緩かに曲つて居るのもある。或は少し角ばつて居るのもある。又中

には、微妙な樂器の絲が振動するやうに、細かに振へて居るのもある。更に凝視すると、肉眼では見分けかねる程の小さな點點が、其等の線の間に數かぎりもなく印せられて居る。さうして、その點點は大抵は色色の幅をもつた二條の平行線を形成して居る。之は恐らく何か小さな昆蟲か蜘蛛などの通つた跡であらう。

自分が其處に佇んで居る間に、體の長さが僅に一分ばかりのハネカクシ*と、これも同樣に極めて體の小さな、蠅の類の幼蟲かと思はれるものとが、その跡

*昆蟲の名。

に長長と微かな線を殘しながら、泥の上を歩いてゐた。勿論、此等の線を作つた物は、その他にも色色あらう。が、それはともかく、こんな小さい水溜りの泥の上に、何千本といふ澤山の線を作つた動物は、今、何處へ行つて居るのだらう。

かうして、流の畔を逍遙して居る間に、そぞろに、自分といふものが、その邊にある草や木や蟲や魚や鳥や、乃至はその流の水などとさへも、何の隔りもない同じ仲間のやうな氣持がして來た。深い興味と強い親しみとを覺えて、それから後も、よく自分はこの流

のほとりを尋ねた。（石井重美―自然と科學）

六　競馬

私は某祭典の競馬に是非加はつて見ようと、その日の來るのを指をり數へて待つてゐた。さて待ちに待つた當日は日本晴の好い天氣で、朝早くから、既に幾萬の參拜者は競馬場の周圍につめかけ、十重二十重に人垣を造つて居た。

十五回目の勝負がすむと、各隊聯合の大競馬が組合された。砲兵の殘雪と宮野、輜重兵の鯨波と群雀、それに私の乘つた騎兵の金石である。見よ、馬場の起點に頭を並べた五頭の馬匹を。何れも各隊えり拔きの名馬で、特に鯨波は去年も各隊の聯合競馬に一等賞を得た逸物、その他宮野といひ、群雀といひ、何れ劣らぬ駿足、また殘雪は某隊長の副馬で、みな侮るべからざる强敵である。併し金石も輕輕しくひけを取るべき馬ではない。

金石は福島縣田村郡三春の產で、當年七歲、身幹四尺八寸、體量九十三貫、紅鹿毛、特徵は新月形の星額、頭は輕く、眼は澄み、威があつて、實に完美な馬であるが、

一つ恐るべき癖がある。若しも彼の左の牙齒へ大銜が一寸でも觸れたら、それこそ一大事、溝でも岡でも、何處と云ふ差別なく狂ひ奔るのである。この場合には、如何に巧な乘手でも、彼が大障碍物に衝突して彼自身止まる迄は、決して御し得ぬ難物である。併し私は未だ一度もその癖を出させない。私は聊か彼を御する祕訣を自得して居る。とにかく有名な癖馬であるから、これ迄の競馬には誰も乘手がなかつた。隨つて彼の眞の速力は世に知られなかつたが、今この一組の勝負によつて、わが金石の實力の如何を試す時

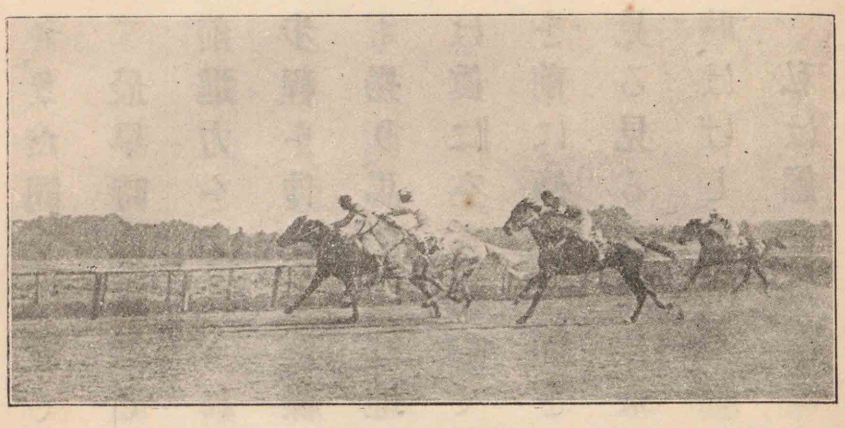
節が到來したのである。

棧敷で見物して居る各隊の將校は勿論、下士卒に至るまで、口にこそ出さね、騎兵に負けるな、輜重兵に勝たすな、砲兵に劣るなと、各自分の贔屓贔屓に、手に汗を握り肩を怒らして力んで居る。嗚呼、この勝負、果して如何。この晴の場處でも、私は寧ろ自ら信ずる所があるため平氣であつた。併し金石は私よりもなほ平氣であつた。一度この馬場を踏んだ馬は、既に頭を並べた時、鬣は立ち、眼は怒り、或は前肢を揚げて空を叩き、或は後肢を躍らして土を蹴り、今にも飛びださ

うといふ勢で、助手の二人も附いて兩口を取つて控へて居ないと、合圖まで待ちきれない有樣である。然るに私の乘つた金石は、四肢を揃へて、正駐立の姿勢を取り、靜に命令を待つものの如くであつた。

程なく、競馬係は時刻を計り、注意の聲と共に前進の合圖を鳴らした。待構へた乘手が手綱を緩めると同時に、五頭の馬匹は吾先にと駈出した。その速さ、何とも言へない。私は起點から約五百※メートルの間は、ただ前馬の尻に尾いて行くのみで、少しも追越さうとはしない。この時の位置は、第一が鯨波、第二が殘雪

※Metre. 佛國の尺度。我が三尺三寸許に當る。



と群雀とで、第三が宮野、最後が金石である。第一の鯨波と私の金石との間は、既に五六十メートルも離れて居る。數千の群集は、「騎兵負けるな、負けるな。」と囃し立てるが、私は少しもあせらない。八百メートルの邊では、殘雪が眞先で、鯨波と群雀とが雁行し、宮野が私の前に居る。互の距離は段段遠く、見物は益叫ぶ。九百メートル。千メート

ル、まだ同じ位置で、全距離の約三分の二は經過した。

最早時分は好しと、私は輕く拍車を入れた。今まで前進力を抑へられて居た金石は、一時に逞しくその歩程を伸ばした。繰出す前肢の膝頭は、耳の高さまでも揚り、馬の腹は地を摺るが如く、伸しきつたる四肢は眞に空を蹴つて飛ぶやうである。私は少しく上體を前に傾け、手綱をつめ、又も二つ三つ拍車を加へた。見る見る宮野を乘越え、鯨波を切拔け、殘雪に並んだ時、はげしい喝采が起つた。

私は態と殘雪に並んで、百メートル許、外側を進行

した。その際に、相手の姿勢を見ると、拳は上り、手綱は伸び、騎座は浮き、徒に拍車を亂打して居るけれども、初から全力を出した馬は、もう少しも感じない。ここに至ると、金石はまだまだ推進力が十分ある。

いで、一つ最後の奮鬪を試みようと、私は強く拍車を二回入れた。金石は小振ひして、忽ち殘雪の鐙をこすつて、電光石火の勢で驀進した。その快速なこと、實に鞍上に人なく、鞍下に馬なく、ただ一陣の疾風である。先登第一は無論である上に、決勝點に到着した金石は、合圖の銃聲と同時にぴたりと駐止した。これに

は自分ながら驚いた。又馬術の心得ある者は、いづれも驚いて舌を捲いた。この競馬で私は名譽ある特別優等賞を得たが、これは全く金石が名馬であつたからである。（某騎兵の文に據る）

七　千本松原上

沼津*の町の細い横町を二曲り三曲りして、昔の東海道通へ出た。右へ少し行つて町を出て了ふと、小さな川がある。子持川とかいふさうだ。土橋を渡ると、左側の萱葺屋根の家から、筒袖を着て下駄をはいた、五

*駿河國駿東郡にあり。

十位のふとつた男が出て來て、「今、馬車が出ますが如何ですか。」と言ふ。「いや、わしは千本松原へ散歩に來たのだが、首塚といふのはどの邊か。」と問うた。すると其の男は丁寧に腰をかがめて、「さうで御座いますか。御首樣は、この川のふちを眞直に松原に這入れば、すぐ解ります。」と言つた。その音聲から態度まで、如何にも善良な人らしく思はれた。苟且の事ながら、予は頗る愉快を感じた。

千本松原はすぐ眼の前に横たはつてゐる。幾萬本あるか分らぬ程の松が背くらべをして、雲を衝いて

ゐる。天氣が曇つてきて雨模樣であるから、松の梢が雲に屆いてゐるやうだ。のそのそ歩いてゆくと、間もなく松原で、其の中に杉丸太の小さな鳥居がある。八尺許の石碑が建つてゐる。表に「首級塚碑」と記し、明治三十三年に髑髏百餘茲に露出したのを、同三十五年五月、土地の人が相謀り、石を建てて之を弔うたと書いてある。*天正八年、武田勝頼が北條氏政と此の地に戰つた時、首級を茲に埋めたのであらうとの事である。今は日露戰爭の最中だが、これから百年たち、二百年たち、三百年たつ間に、雨に潰え、風に損はれて、幾萬

*二二四〇。

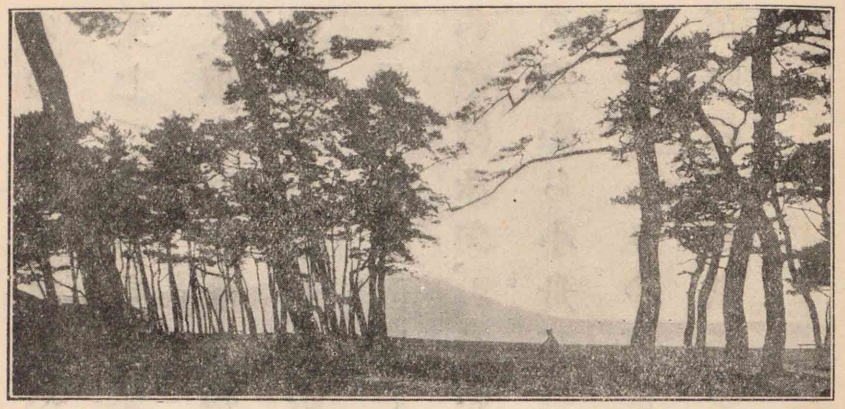
の髑髏が滿洲の野に露出する樣な事はないであらうか。若し又さういふ事のあつた場合、この地の人の如き優しい心がけの人があつて、石を建てて厚く弔うてくれる樣な事があらうか。思へば此の百髑髏などは幸福と言はねばならぬ。閑雅・清淨な地に祭られて、土地の人人には「お首樣」「お首樣」と崇められて居る。古來、戰場の露と消えた人は數限なくあるが、三百年はおろか、二百年はおろか、百年の後にも、その跡の認め得られるものが幾許あるであらうか。

松原の中へ這入つて見ると、外から見たよりも一

層立派な松原である。三かかへもある古木が相競うて、十丈以上に高く立つて居る。その壯快な趣は何とも形容が出來ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味なものであるが、此處では風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつて居るので、頗る趣がある。巨大な幹や繁り繁つた枝や葉を、しつかりと支へてゐる根張りの力が、十分その形に顯れてゐる。實に見る眼も氣持がよい。この高大な壯快な趣は、到底舞子(一)などの及ぶ所ではない。

松原を出ると、芝原に明屋らしい家が一軒ある。そ

(一)播磨國明石郡垂水村の海濱。古來青松白砂の地として著名なり。



千本松原

の前を通つて波打際へ降りて見る。海は極めて穏かで、眞城山(二)や大瀬崎(三)などが手にとるやうに見える。西の方、久能山(四)や三保(五)などは薄黑い雲のやうである。のたりのたりと波がよせる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中にあ

(二)(三)伊豆國田方郡に在り。

(四)(五)駿河國安倍郡に在り。

るのが殊に美しく見えるので、波のひいたところに乘じて取らうとする。復、波がすぐ寄せてくる。波が引く、取らうとする。復、波がすぐ寄せ返す。とうとう片方の足袋を濡したが、その小石は取れなかつた。波が石を惜しむ樣に感じた。三十間許の沖を、鵜が三羽かついでは泳ぎ、かついでは泳ぎ、東の方へ泳ぎ行く。(一)鈴川の邊から小舟が二艘、ゆたゆたと櫓を押してくる。のたりのたりの波と能く調和してゐる。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとして來た。

(一)駿河國富士郡元吉村にあり。

八　千本松原下

予は(一)六代松を見る心組であるから、この邊から上つたらよからうと氣づいて、松原に向つて上つた。松原を通り拔けて里へ出る道がついてゐる。その路傍の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が、砂利を磯から荷車へ搬んでゐる。予がその親爺に六代松の所在を尋ねると、親爺は先づ鉢卷の手拭を外し、姿勢を正して答へた。「はい、六代松で御座いますか。私は此の村の者ではありませんが、人樣に尋ねられてもと思ひまして、聞いて置きました。六代松と申して

(一)平維盛の長子六代、この地にて將に刑せられんとせし時、鎌倉より赦免の使者到着して、刑を免れし遺跡なり。

も松はありません。あそこに墓場があります。向うの垣根とその墓場との間を右へ曲れば、向うに小さい森が見えます。その森の中に印の石が立つて居ります。はい。」先の馬車を勸めた男といひ、又この男といひ、予はその篤實なるに深く心を動かしたのである。

なる程、六代松と云ふ松はない。常磐木の小さなこんもりとした森の中に、ささやかな石が立つて居つた。非常に大きな松があつたとの事だが、今はその根株の跡すら分らぬ。幾百の生首を一まとめにして埋めたのとは違つて、危き命を助かつた人の悅び、その

(一)僧文覺の苦請によりて赦免せられしなり。
(二)北條時政。

從者どもの悅び、(一)助けた人は勿論、守護の任に當つた(二)北條主從に至るまで嬉し涙にくれた樣、眼の前に見える心持がするのである。

予は松原の中を縱に通つてゐる道を歸つてくる。女の子どもの松葉を搔いて居るのが幾組もある。道理で松原は塵もとめぬ程に掃除されてゐる。

この松原に就て、大いなる愉快を禁じ得ぬ事があつた。それは十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組も出逢うて、この地方の者が、松原で燃料を求めることが知れたに拘らず、篠一本・小松一本、刃物を以て切つ

た痕を見なかつた事である。予は斯く心づいてから、餘程注意して見たが、遂に切取つた痕も、打取つた痕も認め得なかつた。如何にも人氣の篤實な地であると云ふことが明かに察せられる。この立派な松原が少しも損はれずに今日に傳はつたのも、決して偶然ではない。官林の事であるから、妄に竹木を切つてはならぬとなつて居るには相違ないが、人氣が篤實でなくて、どうしてそれが行はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しもその禁を犯さぬといふのは、理窟の力でなくて、民衆の美質に依ることは疑ふ餘

地も無い。初めて沼津に來て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今はそれを知識的に觀察し得たのである。富士の眺も美しい、*靜浦の眺も美しい、千本松原も美しい。併しながら、沼津の人氣の篤實な、眼に見えない美しさには迚も及ばないであらう。

このやうな事を考へながら、急いで歸つてくると、雨がぽつぽつ落ちてきた。予が松原を出ようとすると、松林の小高い處に、十二三の男の子が三人遊んでゐる。そこに居た犬が予を見て俄に吠えだして、予に向つて走つてくる。男の子は頻と犬を叱る樣子であ

*千本松原より東南、伊豆に近き海濱をいふ。

つたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て來る。犬は益〻吠える。やがて男の子は走つてきて、犬を捕へて吠えさせない。予は茲にも一點の美を認めて、もと來た子持川の畔へと出た。

見渡した沼津の町はほんのり霞をこめて、春雨が靜に降つてゐるらしい。（伊藤左千夫の文に據る）

九　愛犬上

僕はポチがかはいさうでならなかつた。折角、親の乳房に縋つてゐる所を、無慈悲な人間の手に無理に引離されて、暗い浮世へ突放たれた犬の子の運命が、如何にも果敢なくかはいさうに子供心にも思はれた。父が逐出して了ふといふのに、僕は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。

犬好きは犬が知る。僕のこの心はポチにも自然と通じてゐたらしい。その證據には、犬嫌ひの父が呼べば、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもしないで行つて了ふ事がある。母が呼ぶと、不斷、食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて、眼を輝かして飛んで來る。さうして母の手中にそれ

らしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶが、唯それだけの事で、その時のポチはやはり犬に過ぎない。

そのポチが、「僕に對ふと犬でなくなる。それとも僕が人間でなくなるのか、何方だか分らぬが、互の情愛が人畜の差別を無くして了ふのだらう。」

ポチは早起きで、僕の起きる時分には、疾くに朝飯も濟んで、ひとつきり遊んだところだが、僕の聲を聞付けると、何處にゐても一目散に飛んで來る。僕が急いで庭へ降りる所を、ポチは透さず泥足で飛びつく。細い人參ほどの赤茶けた尻尾を懸命に掉立てて、嬉

しさうに顔を見上げる、見下す。目と目とぴつたりと合ふ。たまらなくなつて、僕が横抱きに抱く。ポチは抱かれながら身を蹠いて大暴れに暴れ、僕の手を舐め、胸を舐め、顎を舐め、頰を舐め、舐めても舐めても舐め足りないで、惡くすると口まで舐める。父が顏を顰めて、「汚い、汚い。」と言ふ。なるほど、考へて見れば汚いには相違ないけれど、併し僕は嬉しい、止められない。

この顏舐めがすむと、ポチもやつと氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろうろし出して、緣の下などを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一ぱいたかつた古

草履の片足か何ぞがある。好い物を見付けたと言ひさうな顔をして、それをくはへ出して來て、首を一つ掉ると、草履は横飛びにぽんと飛ぶ。透さず追つかけて行つて、又くはへてぽんとはふる。そんなたわいもない事をして活潑に元氣よく遊ぶ。

その隙に僕は顔を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校にゆく段取になるのだが、この時が一日中で僕の一番苦痛の時だ。ポチが跡を追ふ。うつかり出ようものなら、何處迄も何處迄も尾いて來て、逐つたつてどうしたつて歸らない。こつそり出ようとして

も、出かける時刻をちやんと知つてゐて、その時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つて居る。仕方がないから、しまひには捉まへて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出かけるやうにしてゐたが、さうすると、前足で格子を引搔いて、悲しい悲しい、血を吐きさうな啼聲を立てて後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。僕もそれは同じ想だ。泣出しさうな顔をして、ばたばたと駈出し、聲の聞えない處まで來て、漸くほつとして、並の歩調になる。さうして、いつも心の中で繰返し繰返しこんな事を思ふ。

「僕がゐないと淋しいもんだから、それであんなに跡を追ふんだ。かはいさうだなあ。僕は學校なんぞへ行きたくないんだけど、行かないとお父様がポチを棄てて了ふつて言はれるもんだから、それでしやうがないから行くんだけども。」

一〇 愛犬下

じやんじやんと放課の鐘が鳴る。今まで靜だつた校舍内が俄に騷しくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌しくぱつぱつと開く。と、その狹い口から、

眞黑な塊がどつと廊下へ吐出され、崩れてばらばらの子供になり、われがちに玄關脇の昇降口を目がけて駈出しながら、口口に何だかわめく。只もう校舍をゆすつて、わあつといふ聲の中に、無數の圓い顏が聲も出さずに大きな口を開いて躍つて居るやうで、何を喚いて居るのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又ごたごたと入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭がひよつと出たり、反齒に肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして、上を下へと揑返した擧句に、わつと門外へ押出

して、東西へちりぢりになる。

仲よし二人、肩に手を掛合つて行く前に、辨當箱をぽんとはふり上げてはちよいと受けてゆく惡戯者がある。その隣のは、往來の石ころを蹴とばし蹴とばし行く。誰だか「あとで遊びに行くよ。」とわめく。「蝗を取りに行かないか。」と誘ふ聲もする。がやがやがやがやと友達は皆道草を喰つて居る中を、僕一人は駈拔けるやうにして、脇見もせずに、せつせと歸つて來る。

家の横町の角まで來て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつとその方角を見る。果してポチが門前

へ迎へに出て居る。僕を見付けるや否や、一散に飛んで來て飛付く。舐める。何だか「兄さん」と言つたやうな氣がする。若し鞄に辨當箱に草履袋で兩手がふさがつてゐなかつたら、僕はこの時ポチを捉まへて、何をやつたか分らないが、それがあるばかりに、どうする事も出來ない。よんどころなく、頭を撫でてやるだけにして、不承不承に又歩き出す。と、ポチも忽ち身をくねらせて、横飛びにひよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて僕の顔を見て、おどけた眼色をする。追付くと、又逃げて、又その眼色をするかうしてふざけな

から一緒に門を這入る。

玄關から大きな聲で「只今」といひながら、内へ駈込んで、いきなり鞄を其處へはふり出し、あわてて辨當箱をあけて、今日のお菜の殘と稱して、實はたべたかつたのを我慢して、半分殘して來たのをポチに遣る。それでも足らないで、お八つにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて、二枚はたべて、三枚はポチに遣る。

それから庭でひとしきりポチと遊ぶと、母が屹度「おさらひをなさい。」といふ。このおさらひほど僕の嫌

ひな事はなかつたが、これをしないと、ぢきポチを棄てると言はれるのが辛いので、澁澁うちへ這入つて、形の如く本を取出し、少しばかりおんによごにによごとやる。それでおしまひだ。「餘り早いね。」と母が言ふのを、空耳つぶして、つと外へ出て、「ポチ來い、ポチ來い。」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが僕の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。（二葉亭四迷の「平凡」に據る）

一一 新綠の頃

自然の恩寵を心から感謝し、自然の美に心醉し、柔かい自然の懷に這入つて見たい氣持にならされるのは、新綠の頃が最もさうである。

新綠の頃になると、私は何故となく懷しい感情が胸の底から湧いて起るのが常である。蕭條として滿目枯死せる冬の季節から、天地が生生の氣に蘇つて來て、自然は豐麗な色彩に彩られる。この環境の變化が人間の心を化して、自ら生存の幸福を感じ、生生きとした感じを覺えしめるであらう。

人人は、その頃から、室内よりも野を思ひ、山を慕ひ、

草木を親しむやうになる。野には既に菜の花の黃もすがれて、その花の生れ代りでもあるかのやうな蝶蝶も老い、薹の伸びた衰殘の花から花へとさまよふ。青い麥は穗を拔いて來る。蠶豆や豌豆の莖や蔓が成育して、薄紫の花が五月の太陽に照される。蓮華草の紅紫色の花は今が盛りで、處によつては農夫は稻を植ゑる支度に、野草を掘返して、水田に水をしかけて居る。何處からともなく蛙の啼く聲が懷しく聞える。私は、かういふ時に、只、生きて居ることの幸福を覺え、大なる愉快を感ずる。そして、又それと共に、靜に暮れ

てゆく晩春の日の永きを想ひ、夕暮の新緑に映る灯の色の面白さに、そぞろに淡い物懐しい感情を唆られることもある。

私の體驗に據ると、毎年五月の頃に最も健康を覺えるやうである。夏期の炎暑と闘つた疲勞は、十月清秋の候に至つて恢復するのであるが、嚴冬の寒威に萎縮してゐた心身は、新緑の季節になつて十分に伸び伸びする。そして、この新緑と共に恢復した健康を以て、私達は、間もなく押寄せる夏期の炎暑を征服しなければならぬ。それにつけても、晴晴しい皐月の陽

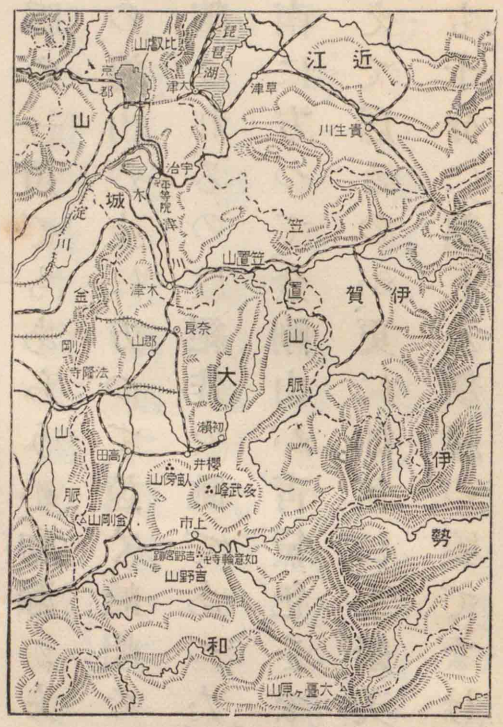
光に接することは望ましい。

新緑の時分になると、何處へ行つて見ても、凡てこの世界が美しく樂しいものに思はれる。やがて夏が來て、秋が來て、初冬の頃にもなれば、空しく枯れて了ふものだと知りつつも、そんな事など考へる暇もなく、ただ眼に見る清清しい生き生きした緑の世界が、人間の心を化して、生存を樂しく思はせるのである。夏の暑さ、冬の寒さには、思はず愚痴をこぼす人があつても、此の新緑の好季に對しては、どうして不平が言はれよう。

私は或年、それはもう五月の末頃であつたが、京都から宇治の方を巡つて奈良の方へ旅をしたことがある。桃山から宇治へ行つた日は、烈しい暴風で、砂煙が起つたが、その夜、宇治に泊つた晩には誂向の雨になつて、しとしとと、一晩中、若葉に降灑ぐ雨の音を聽いて靜な夜を明し、心ゆくばかり宇治の新綠を味つて、翌日は雨の霽れかけた午頃、そこを立つて奈良の方へ向つた。汽車の窓から見て居ると、南山城のあたりは、殊の外、新綠の美しい處である。柿の嫩葉など多く見られる。やがて木津川を渡り、木津驛を經て、奈良

(一)淀川の一支流。
(二)奈良より一つ京都に近き驛。

に近づくと、午前一旦晴れかかつた空に、その頃の天候の常として、再び雨模樣の雲が油然として起り、次第に濃厚になつて來た。笠置山脈に續く奈良東方の連山は、墨を流したやうな黑雲が物物しく中空を鎖した爲に、山の形が一層鮮かに浮上つて見えた。



その時、私は奈良を通り過ぎて、法隆寺へ行つて見

(三)奈良の西南方約三里の地に在り。

る積りであつた。大和平野の遠景・近景を車窓から眺めて行くと、大臺ヶ原山(一)であらうか、それとも大峯山(二)脈の一角でもあらうか、初瀬(三)から多武峯(四)に續く一帶の連山の上に方つて、遠く、嶮岨な高嶺の頂が幽かに望まれるのは絶佳な眺であつた。併し少し右手の西南に方つて、金剛山(五)が青黛色(タイ)をなして巍然として聳えて居るのが、更に如何にも崇美であつた。それは春も十分に熟した新緑の頃でなければ見られない山の色、野の景色であつた。それにつけても思ふのは、蕪(六)村の句である。

(一) 伊勢・紀伊・大和の國境邊の高山。
(二) 大和の脊柱をなす大山脈。高さ千九百米を超ゆる佛經嶽などあり。
(三) 奈良の南東約五里の地なる初瀬町の北方に聳ゆる山。
(四) 初瀬の南方約二里半の地にあり。
(五) 河内・大和の國境に聳ゆ。標高千百十二米。
(六) 德川時代の有名なる俳人。

大和路の宮も藁屋も燕かな

又或年の五月の初、大和路を經て、新緑の吉野に分入つたことがある。ずつと奥の方へ行けば、まだ櫻が少しは咲殘つて居るといふ頃、夕方に吉野驛に下車し、約一里半の山路を二人輓の俥で吉野に登つた。晝間から強い南の風が吹きすさんでゐたが、山を登つて行く頃、一天眞暗に搔曇つて、その晩遲く宿に着いて、一浴の後、夕飯を認めて居る時分から、山を流すかと思はれる物凄い豪雨が沛然として襲ひ、雨戸に鳴りはためいた。私は悲壯な感慨を以て吉野の雨聲を

聽いてゐた。ところが、翌朝になると、一山の風物は拭うたやうに朗かになつて、後醍醐帝の吉野宮趾に立つて回顧すれば、金剛山は昨夜の雨に洗はれて、匂ふばかりに懷しく、西方の天に浮上つて見える。

私は、それから櫻の若葉の蔭を踏んで延元陵(一)に詣でた。（近松秋江の文に據る）

(一) 後醍醐天皇の御陵。

一二　錦の直垂上

元弘三年、大塔宮護良親王(二)の吉野に立て籠らせ給ふや、北條高時の部將、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎を率ゐて之を攻む。(三)菜摘川の畔より遙に城の方を見上ぐれば、嶺には旗幟風に飜りて雲のたなびくが如く、麓には兵仗日に輝きて星の閃くに異ならず。

戰端忽に開かれ、交戰七晝夜、兩軍の死傷幾何といふ數を知らず。鮮血草を染め、尸屍路に横たはれり。吉野の執行岩菊丸、東(四)軍の嚮導として陣中にあり。部下百五十人を選び、夜に紛れて、密かに後の山に忍び入り、火を放ちて攻戰ふ。城兵前後に敵を受け、今は防ぎ戰はん術もあらねば、はやこれまでぞと、皆死を決して敵を衝く。

(二) 後醍醐天皇の第三皇子。

(三) 吉野川の上流。

(四) 北條氏の軍。

大塔宮も親ら敵中に駈けいりて、東西に切りなびけ、南北に薙ぎはらひ給へば、敵兵は度を失うて、やや遠く遁れ走る。宮は藏王堂の大庭に引還し給ひ、早くも御覺悟を定めさせられ、酒を召して最後の宴をぞ開かせ給ふ。

敵の征矢の御鎧に立てるもの七筋、御腕にも御顏にも各二個所の御創あり、鮮血流れて淋漓たり。宮は矢をも拔かせ給はず、血をも拭はせ給はず、大盃を把つて傾け給ふこと三度、御英氣溢るるばかりなり。時に木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒先に敵の首を差貫き、宮の御前に出でて、聲高らかに謠ひ且つ舞ふ。節は沈痛、調は悲壯、一座慨然として悲憤の涙を灑がざるはなし。

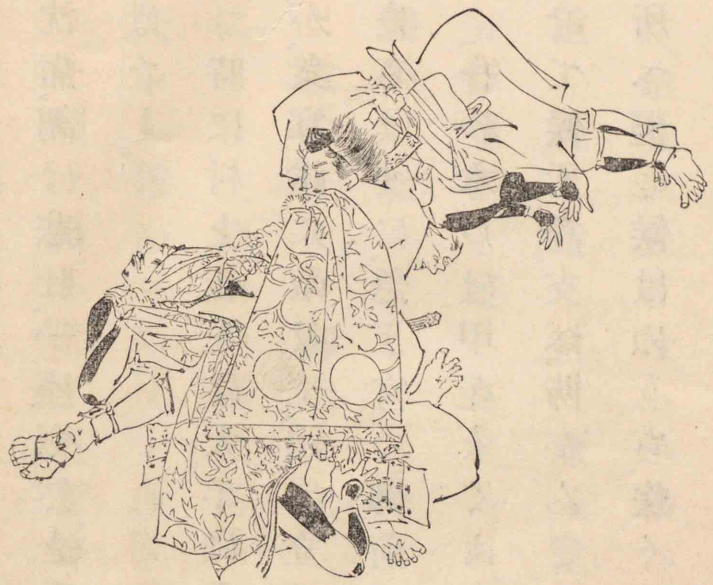
時に村上義光は大手に在り、鎬を削りて戰ひけるが、衆寡遂に敵せず、鎧に立つたる矢十六筋、折りかけたるままに、急ぎ宮の御前に馳せ來り、

「一の木戸は甲斐なくも打破られ、敵は間近に攻寄せて候。所詮支へ防がんこと叶ひ候はず。敵の勢を餘所へ廻し候はぬうち、疾く一方を打破つて落ちさせ給ふべし。但し後に殘りて戰ふ者なくんば、敵はそれ

※金峯山寺の本堂。

と心得て、いづくまでも追ひかけ參らせん。畏多くは候へども、某御諱を冒したてまつり、御命に代りて此處にて討死仕らん。疾く疾く錦の御直垂と御物具とを下し賜へ。」

宮、聞し召されて、御首を打掉らせ給ひ、



村上義光（前豐公故實所載）

「いかでさることあるべきぞ。一處にこそともかくもなるべけれ。」

と、股肱の臣を惜しみて聽させ給はず。

かくては果てじと、義光態と言葉荒らかに諫めまゐらせつつ、進み寄りて御鎧の上帶を釋き奉る。宮御感淺からず、御涙ながらに御物具・御直垂を脫替へさせ給ふ。

「我がためにかかる忠臣を捨てんこそ悲しけれ。幸に生殘りたらば、厚く汝の後生を弔はん。若しまた敵の手に掛らば、同じ冥途の獨に伴なはんずるぞ。さらばぞ、義光。」

御名殘惜しげに、見返り見返り落ちさせ給ふ。

一三　錦の直垂下

義光今は心安しと、宮の御直垂を着し、御鎧を纏ひ、急ぎ二の木戸へと取つて返す。折しも息喘ぎ馳せくる若武者あり、これぞ一子義隆。時に年十八、武勇をさをさ父に劣らず。

「父上は宮の御身に代らせ給ふものを、爭で某一人御後に命ながらへ候はん。父子與に忠義の鬼とならんと存じてこそ參り候へ。」

父は主に代り、子は父に殉はんとす。義光深く心に感じ、熱涙胸に迫りて、暫しは聲も出でず。ややありて、

「父子の義重しと雖も、主從の義は更に重きぞ。宮此處を落ちさせ給へど、御先途いと心もとなし。暫く父に殉はん命を長らへて、宮の御爲に捨て奉らんこと、これ主への忠、父への孝ぞ。未だ遠くは落ちさせ給ふまじ。疾く疾く追ひつき奉れ。」

言葉しづかにいひ諭せば、義隆げにもと覺えけん、「さらば。」とばかり、いさぎよく父に別れて、急ぎ宮の御跡を追ひ奉る。子を返すも忠のため、父に別るるも忠の

ため、忠こそ人の命なれ。

義光乃ち高櫓の上に駈上り、目を擧げて宮の御後姿を見送り奉れば、勝手明神の前を南へと落ちさせ給ふ。義光今は斯くこそと、櫓の狹間の板を切つて落し、身をあらはにして大聲に呼ばはりけり。

「如何に東夷ども、よく承れ。今上天皇第三の皇子一品護良、逆臣のために亡されて、唯今此處にて自害せんずるぞ。この有樣を見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹切らん時の手本にせよや。」

鎧を脱ぎて櫓より投げおとし、錦の鎧直垂の袴ばかりに膚おし脱ぎ、刀を取つて左の脇に突立て、きりりと右の脇まで一文字に搔切り、腸を摑み出して、さつとばかりに櫓の板に投げつけ、太刀を口に銜へて俯伏しに打伏す。

追手・搦手の寄手かくと見るより、

「すはや、大塔宮の御自害ぞ。われ御首を賜はらん。」

われ先にと二の木戸に押寄せ來り、四方の圍み忽に解く。宮はこの隙に天の河の方へと落ちさせ結ふ。

岩菊丸の部下五百餘騎、兼ねて案内を知りたれば、宮の落ちさせ給ふと見るより、その遁路を塞ぎて打

留め奉らんと、太刀を拔連れて追ひかけ來る。義隆既に御供の列に在り。ただ一人踏止まり、奮然として、寄せくる敵に立向ふ。

幸にして道幅は狹し、二人とだに並び進むこと叶はず。義隆乃ち太刀を揮つて道の眞中に立塞がり、來る敵も來る敵も皆斬つて仆し、或は首を刎ね、或は足を拂ふ。敵多しと雖も、唯一人の義隆に支へられて、暫しは進むべくもあらず。

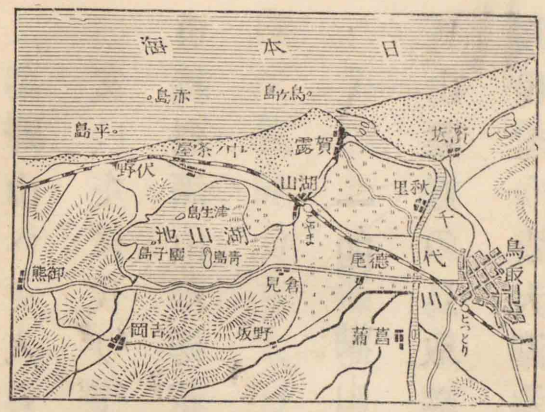
義隆氣節石の如く、能く强敵を遮り得たりと雖も、身金鐵にあらねば、矢創刀創あまた身に負ひて、遂に戰はん力も盡き、躍つて小笹の中に入り、自ら腹搔つさばいて死す。宮はこの隙に虎口を遁れさせ給ひ、終に高野山へぞ入らせ給ふ。

父は主に代りて死し、子は主の爲に殪る。父子の忠勇義烈、滿山の櫻花と共に千古に芳し。（日本史蹟に據る）

一四　湖山長者

山陰線の鳥取驛から西の方へ二里ばかり行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池といつて、周囲四里近くもあらう。西南の方には丘陵や小山が波のやう

に起伏して、春は爛漫たる紅白の花に彩られ、夏は滴る樹樹の翠に潤され、秋は燃えたつ千しほの紅葉に飾られる。東北の方には田畑がひろびろと連なり、砂丘を隔てて、遙に渺茫たる碧の海を望むことが出來る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねた上に、湖の面には、時時、蘆荻の生



茂つた間に鷺や鷗の閑眠を貪るのが見え、また仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗を捕るのも見える。景

色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居た。着るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は見渡すかぎり廣廣と、稻の波を打たせて居た。たとへば、天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中の事何一つ、この長者の思ふ儘にならぬものはないやう

であつた。

ある年、夏の田植時のことである。湖山長者の家では、季節中の最上吉日を卜して、その廣田に田植をすることになつた。長者の家に使はれてゐる者は勿論、近郷近在の者ども迄、今日こそ長者の田植だといふので、老幼男女數を盡して、身支度かひがひしく、我も我もと田圃をさして出掛けて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙に見渡しつつ、己が限ない富に、思はず得意の微笑を浮べてゐた。

仕事は面白いやうに捗つて、早苗取る男女の手の

動く度毎に、廣廣とした水田の面は、片端から若若しい綠色に彩られて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くなつた。仕事はめきめきと運んだが、名に負ふ長者が廣い田地のことであるから、植ゑるに果しなく、まだ數段殘つてゐる中に、日ははや西の山に入らうとした。

長者は之を見て、ああ、今少し日が高ければ全體めでたく濟まうものをと、暫し深い思に沈んでゐたが、つと立上つて、持つてゐた黃金の扇をさつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさし招いた。

今しも山の端にかかつてゐた夕日は、見る見る三段ばかり昇つて來た。田に立つてゐた村人達は、天道様をも左右する長者の威力を目のあたり見て、いかに驚いたであらう。かくして、これ迄と思はれた田植も都合よく捗つて、その日は無事に暮れた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜はやがて明けた。朝の床を起出でた長者は、入日を招き返した喜と心驕とで、眼中いよいよ何物もない。傲然とした態度で、召使や村人達を呼んで、「昨日一日で植ゑあげた田の様子を見て來い。」と命じた。ところが、出

掛けて往つて、誰一人、腰を拔かすばかりに驚かぬ者はなかつた。

驚くのに無理はない。

見よ、さしもに廣かつた長者の田地は跡形も無く消えて、漫漫と湛へた湖が、朝嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日中植付けた早苗は一本も見えないで、渚には茂れる蘆が波に洗はれ、風に戰いで居るではないか。

長者の家はこの時から一日一日に衰へた。そしてつひに、この廣い田とおなじやうに、全く亡びてしま

つた。（五十嵐力の「趣味の傳說」に據る）

一五　常山木の花

まだ小學校に通つてゐた頃、昆蟲を集める事が友達仲間で流行した。自分も母にねだつて、蚊帳の破れたので捕蟲網を作つて貰つて、土用の日ざかりにも恐れず、これを携へて、毎日のやうに蟲取に出かけた。蝶や蛾や甲蟲類の一番澤山に棲んで居る城山の中を、彼方此方と追廻つて、永い日を暮した。二の丸・三の丸の草原には、珍しい蝶や「ばつた」が夥しい。少し茂み

に這入ると、樹木の幹に樣樣の甲蟲が見つかる。玉蟲・黃金蟲・米搗蟲の類が、かずかず居た。草木の强い香に咽せながら、胸を躍らせながら、こんな蟲をねらつて歩いた。捕へて來た蟲は熱湯や樟腦で殺して、菓子折の標本箱へ綺麗に並べた。さうして、この箱の數の增すのが樂しみであつた。蟲取から歸つて來ると、からだは汗でびつしよりと、顏は火のやうにほてつた。どうして、あんなに蟲が好きであつたらうと、母が今でも昔話の一つに數へる。

年を經て面白い事にも出會つたが、あの頃、珍しい

蟲を見付けて捕へた時のやうな烈しい喜は稀である。今でも城山の奥の茂みに蒸された朽木の香を思ひ出す事が屢ある。

何時か、城山のずつと裾の壕に臨んだ暗い茂みにはひつたら、一株の大きな常山木があつて、桃色がかつた花が梢を一面に蔽うてゐた。散つた花は風に吹かれて、汀に朽沈んだ泥舟に美しく散らばつてゐた。この木の幹には處處蟲の食入つた穴があつて、穴の口には細い木屑が蟲の糞と共に零れかかつて、一種の臭氣が鼻を襲うた。やがて木の幹の高い處に、大きな見事な兜蟲が嚴しい角を立てて止つて居るのを見つけた時は嬉しかつた。自分の標本箱には、まだ兜蟲のよいのが一つもなかつたので、胸を轟かして網をさし上げた。少し網が屆きかねたが、やうやう首尾よく捕れたので、腰につけてゐた蟲籠に急いで入れて、包み切れぬ喜を抱いて森を出た。

やがてお壕端まで來ると、向うから美しい蝙蝠傘をさした婦人が、子供の手を引いて、樹蔭を傳ひ傳ひ來るのに逢つた。子供は大きな新しい麥藁帽子の紐を可愛い頤にかけて、純白な洋服を着てゐた。自分の

提げてゐる蟲籠を見付けると、母親の手を離れて覗きに來たが、眼を圓くして母親の方へ駈けて行つて、袖をぐいぐい引張つて居る。と思ふと、また蟲籠を覗きに來た。母親は「早くおいでなさい。」と呼ぶけれども、なかなか自分の側を離れぬ。强ひて連れて行かうとすると、道の眞中に踞んで了つて、到頭、泣出した。

母親は途方にくれながら小聲で諭して居る。その時、自分は蟲籠の蓋をあけて、兜蟲を引きだし、路傍の相撲取草を一本拔取つて、蟲の角をしつかり縛つた。そして、「さあ」と言つて子供に渡した。子供は、きまりが

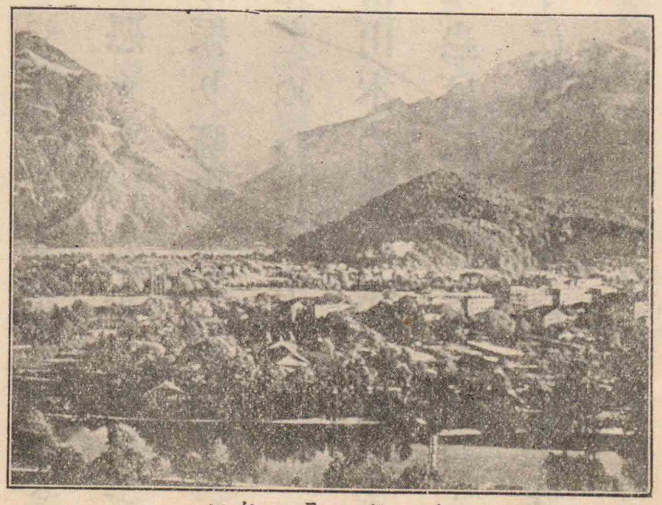
惡さうであつたが、それでも泣止んで、嬉しい顏をする。母親は驚いて、子供を叱るやうにしながらも禮を言つた。自分も何だか極りが惡くなつたから、默つて、空になつた蟲籠を打振り打振り駈出したが、嬉しいやうな、惜しいやうな、嘗て覺えぬ心持がした。

その後も、たびたび同じ常山木の花の下へ行つたが、あの時のやうな見事な兜蟲は二度とは見付けられなかつた。又、あの時の親子にも再び逢ふことがなかつた。（「藪柑子集」に據る）

(一) Alps.　(二) Switzerland.　(三) Interlaken.　(四) Jungfrau.

一六　夏の瑞西

アルプ(一)一體の、皚皚たる白雪を戴いて重疊せる連山と、谷間谷間を流れる大氷河と、その麓に湛へた明媚な湖とから出來てゐる瑞西(二)の國は、實に歐洲大陸の銀冠と稱すべきである。箱根ならば湯本ともいふべきイ・ンターラーケン(三)の邊から登つてゆくユング(四)



インターラーケン

(五) Godhalt.　(六) Luck Sack.(獨) 背嚢。

フラウの一角や、ゴッドハルト(五)の附近から南にかけた地方の眺望は、實に天下の壯觀である。

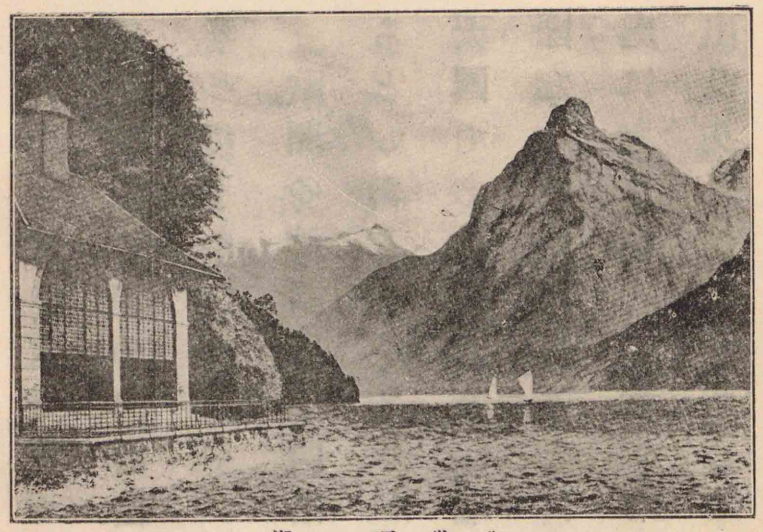
徂徠する白色や灰色の叢雲の間に、雪の帽子、氷の衣裳、悠然とその偉大な頭を顯して居る嶺。その半腹に至るまで登山鐵道が架設してあつて、それに乘つて大傾斜の上を徐に登つてゆく時の爽快さは、何にも譬へやうがない。顧みれば、脚下には、鏡の如き湖水が清澄な其の懷を開いて横たはり、彼方此方の平地には、アルプの高山植物が繚亂として咲亂れてゐる。其の間を、リュックサック(六)を背にした山人達が、山羊

(一) Lucerne.　(二) Geneva.

の角の附いた杖を曳きつつ、三三五五上下して居る。段段に登り詰めると、遠くは雲の海に一帶の連山がその頂を表して、群島の如く浮んで居る。近くは數十丈の氷の巉巖が日光に反射するその眩ゆさ、それに冷氣は肌を襲うて、既に夏の人ではない心地がする。

湖水の絶景としては、第一はルツァン湖で、海拔一千米の高處にあり、湖畔の風光は最も佳絶で、高山や幽林が清澄な湖面に倒映して、一層の美觀を添へる。又、厚さ十尺の城壁と美しい塔とを有する古城が其の畔にあるゼネヴァ湖も比類のない美觀である。

(三) Hotel. 旅館。
(四) Yacht.
(五) Boat.
(六) Rigi.



ルツァン湖

余は七月の初頃に瑞西に遊び、ルツァン湖の岸を逍遙して、その風光にあこがれ、急に豫定を變更して、湖畔なる別莊風のホテル(三)に泊つた。碧玉の樣に色彩の鮮かな清冽一碧の湖面には、ヨット(四)やボート(五)が繪のやうに浮んで居る。對岸高く聳ゆるリッギ(六)の山には新裝を凝した大小のホ

テルが儼然として建つて居る。しかも晴好雨奇、湖畔の趣がとりどりに面白いので、一泊の積りが三泊となつて了つた。

歐洲の神話に、瑞西は昔神神の集まつた天國であるといふことがあるが、今日に於ても、少くとも夏は天國である。要するに、瑞西が誇るべき風光は、その湖國たると山國たるとに存する、山と水との雙絶なる處にある。沈んで青ずんだ湖の水に、汀は參差として出たり入つたりし、この緣を縫つて鐵道が敷かれて居る。遙に見上げると、天然の大石筍かとも思はれて、

大雪山が幾つともなく、玉雪の寶冠を被つて、輪郭が明かにずらりと並んで居る。その白い雪の色と、青い空の色と、紫の山の色とが、相互に映發して居る有樣は、何と形容すべきであらうか。さうして、その景色の勝れた場處の彼方此方には、必ず立派な旅館が甍を連ねて居る。ケーブルカー*があつて、見上げる山腹の上にも余等を搬ぶ。かくして、その湖水の畔、その山や谷の間を、或は一直線に、或は迂回しつつ、深谷を俯瞰し、大瀑布を瞻仰し、一峯又一水、殆ど送迎に遑なくして瑞西巡りが出來るのである。

* Cable-car. 架空電車。

瑞西の原野は、極めて好く整つて居る。全く牧場式公園と言つて差支あるまい。併し英國のそれと違つて、勾配の急な青綠の芝原が長く長く續いて、羊や牛が悠悠として草を食つて居る。山羊は嘶き、番犬は眠る。更に遠くから瑞西名物の角笛が嚠喨として響き渡る。凡ての色彩、凡ての形容、凡ての配置を綜合して、瑞西は全く一種の公園のやうに出來て居る。

最後に極めて面白く感じたのは、瑞西の百姓家は殆ど悉く木造であることで、余は覺えず故國に歸つたやうな心地がした。（黑板勝美―歐米文明記）

一七　お祭

わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
祭だ祭だ
背中に花笠
胸には腹掛
向鉢巻そろひの半被で
わつしよいわつしよい

わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
御輿だ御輿だ
御輿のおねりだ
山椒は粒でもぴりつと辛いぞ
これでも勇みの山王*の氏子だ
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ

*東京市麹町區にある日枝神社。但し一般に何處の日枝神社をも山王といふ。

眞赤だ眞赤だ
夕燒小燒だ
しつかり擔いだ
明日も天氣だ
そら揉め揉め揉め
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
わつしよいわつしよ
俺(おい)らの御輿だ死んでも離すな

泣蟲やすつ飛べ
差上げて廻した
揉め揉め揉め揉め
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
廻すぞ廻すぞ
金魚屋も逃げろ
鬼灯屋も逃げろ

ぶつかつたつて知らぬぞ
そらどけどけどけ
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
子供の祭だ祭だ祭だ
提灯つけろ
御神燈あげろ
十五夜お月様まんまるだ

わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
あの聲どこだ
あの笛なんだ
あつちも祭だ
こつちも祭だ
そら採め採め採め
わつしよいわつしよい

わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい
祭だ祭だ
山王の祭だ子供の祭だ
お月様あかいぞ御神燈もあかいぞ
そら採め採め採め
わつしよいわつしよい
わつしよいわつしよい

わつしよいわつしよい（北原白秋―白秋詩集）

一八　梟の聲の話

私の家の前には城のお壕がまだ少し殘つて居る。そのお壕の見える窓が、私の家にはあつた。

お壕は三方とも丘や山で圍まれてゐて、その堤の上には、處處に大きい黑い木があつたり、或處には直ぐ山が續いてゐて、その山とお壕との堺に、山の裾を削つて小徑が通じてゐる。それを、木蔭に見えたり隱れたりして人が通る。その小徑を辿つて登り詰めた

山の頂には、高い柱が立つてゐて、時時その柱の先に赤い大きな「ぽつつり」*が吊し上げられる。それは、今日か明日か暴風雨だといふ警報である。そんな時には、夕方になると、人がとぼとぼと其のぽつつり山へ登つて行つて、夜はその「ぽつつり」の代りに眞赤な小さいランプに火を點す。それが眞黑い空の中で赤黑く光つた。そんな時には、海鳴りが高くて、遠く私の家あたり迄も響いて來た。

お壕の附近は、この通り淋しい處である。こんな處だから、夜になると、裏の城山の森の中であらうか、そ

*丸い竹籠。

れともお壕の向うの藪あたりであらうか、それともお壕の縁の眞黑な椎の大木の梢であらうか、何でも其處らで「ふるつく」※が啼いた。この「ふるつく」といふ鳥が、一遍、ひどい嵐の晩に、その晩もぽつつり山には赤い小さいランプが點つてゐたが、風に吹きまくられて、私の家の中へ逃げこんで來たことがあつた。それを誰かが攫まへて、蛙を毎日食はして飼つて置いたが、餘り臭いので、到頭、逃して了つた事がある。それ故、私はあの鳥をよく知つて居る。

その「ふるつく」が毎晩啼いた。夏の晩にも啼いたし、

※梟のこと。

冬の晩にも啼いた。冬の晩に啼くと、一層怖しかつた。私は母に抱かれて、まだ寢つかないうちにも、よく聞いた。夜中にふと目が覺めても聞いた。

弟子欲し

弟子欲し

「ふるつく」はさう言つて啼くのださうな。私は母からさう教へられた。さうして、なるほど「ふるつく」はさう啼く。

母はまた斯う話して聞かせた。――「ふるつく」といふ鳥は惡い鳥で、惡い事をしたから晝間は目が見え

ない。その代り、夜だけは目が見える。けれども、夜、目の見える鳥は「ふるつく」だけである。「ふるつく」は淋しい。それゆゑ、誰か弟子が欲しいのである。

弟子欲し

弟子欲し

「ふるつく」は獨りで、あんまり淋しいので、誰かを弟子に捜して居る。夜泣く兒を梟は捜して居る。不正直な嘘を言ふ兒を捜して居る。それが見つかると、それを樹の上へ連れて行つて、「ふるつく」にする。惡い子供は皆「ふるつく」の弟子にされる。「ふるつく」の弟子には

(一) 長野縣南安曇郡有明村の山中に在る溫泉。海拔一四六二米。北日本アルプスの著名なる登山口。

(二) 燕嶽の頂上近くに在り、登山客の宿泊に當つ。因に燕嶽の標高は二七六三米。

お父さんもない、お母さんもない。「ふるつく」の弟子は、夜、樹の上で、たつたひとりで、どんなに淋しいか考へて御覽なさい。

弟子欲し

弟子欲し（佐藤春夫―藝術家の喜）

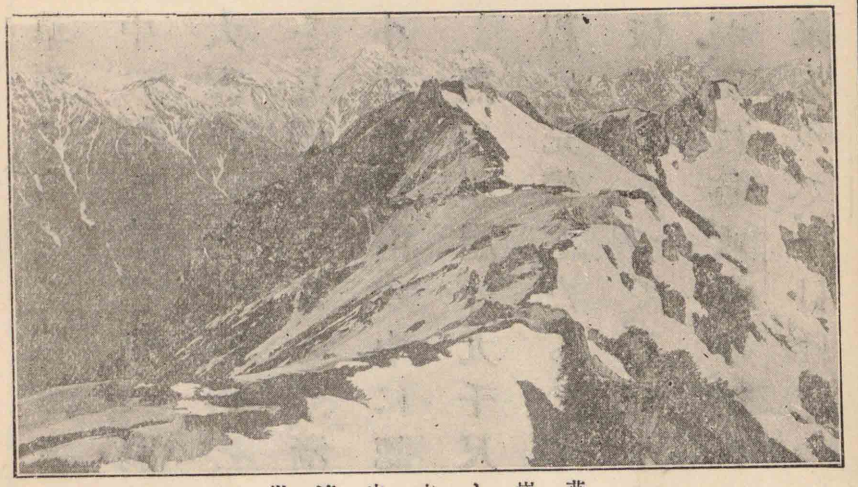
一九　燕嶽の大觀　上

(一)中房溫泉から更に四千尺、ひた登りに登つて、吾吾は燕(二)の小屋に到達する。

最初の間は、熊笹の繁つた中や、「猿をがせ」の垂れさ

がつて居る針葉樹の密林の間を縫ふ一條の小徑を攀登るので、狹苦しさと單調とを感じさせるが、登るにつれて、小徑は次第に緩傾斜となり、眼界は次第に廣闊となる。巓に近づくに從つて、森林帶は脚底に落ち、這松と交互して一面に生えひろがつてゐる「裏白ななかまど」の葉の美しさ。霧に閉されて裾は見えぬが、何千尺の谷底までも生え續いて居るらしく見える柔かな草原の斜面に、白樺の大木が處處に群をなして立つて居る姿の力强さ、清淸しさ。青草の原を斜に縫うて、見え隱れしつつ緩かに巓を目ざしてゆく

※一種の高山植物の名。



燕嶽と立山連峯

徑の兩側に、白や黃や淡紅や淡紫の花をつけた高山植物の咲亂れて居る氣高さ、いぢらしさ。總じて、高山の巓にある一種えも言はれぬ柔かな美しさは、豐かに吾吾の眼前に展開された。

更に登れば、東北から襲ひ寄る烈風が、谷から濃霧を吹上げて、白樺の幹を遠く見せ、

草原の廣さを限なきものとした。さうして此の霧の中に隱れて、雷鳥の鳴く聲が間近に聞えて來た。私は(一)大天井と燕の絶頂との追分に立つて、覺束なく四邊を見廻したあとで、漸く咫尺の間に建つて居る燕の小屋を、霧雨の中に認めることが出來た。

燕の小屋は、九千尺の山上としては勿體な過ぎる程に完備したものである。中房からの登りに三時間ほどかかつて、私が小屋に着いたのは晝前であつた。が、風は益吹募り、時に大粒の雨さへ強く打ちつけて來るので、今日は此の小屋に泊る事に定めた。立迷ふ

(一) 燕嶽の南方に連なる一峯。標高二九二二米。

煙に咽びながら、濡れた衣服を乾かしなどして、榾火の傍で偶然にも落合つた色色の人の話を聞いてゐた。十四と十六との娘二人を連れて、これから大天井(二)東天井を縱走して槍ヶ嶽(三)に登るといふ京都の人が居る。今朝、强風に逆らつて常念(四)嶽から來て、中房へ降りる中休に此の小屋に寄つたのだと言つて、寒さに身ぶるひしながら、それでも酒を飲んで太平樂を並べて居る江戸兒の水兵がゐる。六十七にもなる老父を連れて、是非とも槍ヶ嶽まで行きたいと言ふ地方紳士がゐる。その他、强力や學生や、立ちかはり入りか

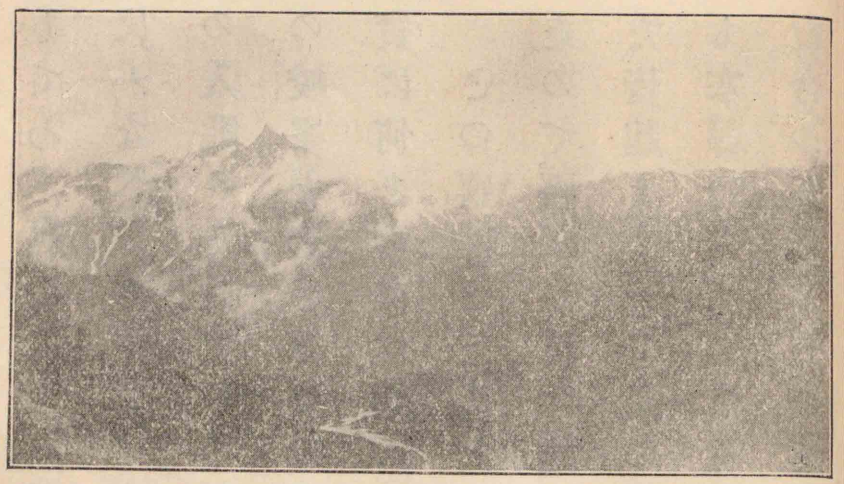
(二) 大天井の東南に連なる。標高二八一一米。
(三) 北日本アルプス中特色ある山容とその高さとに於て最も秀でたるもの。標高三一七八米。
(四) 東大井の東方に高く孤立す。標高二七五七米。

はり、榾火の傍に人は絶えなかつた。

併し、或者は降り、或者は泊り、雨の聲と風の音との中に、山上の日は何時しか暮れて行つた。

二〇　燕嶽の大觀　下

蚤に攻められて眠りにくかつた夜の二時半頃、便意を催して外に出ると、もう風はすつかり止んで、月が雲の間からその光を漏して居るではないか。昨日一日、霧のために見えなかつたアルプスの主脈も、これでは見えないこともあるまいと思つて、小屋の背



燕嶽より槍ケ嶽を望む

後の觀測臺豫定地になつて居る臺の上に登つて見た。さうすると、月光を半ば浴びて、ほのかな白銀の綿かのやうに、ふわふわと眼下に浮び漂ふ雲の間から、墻壁のやうに連なつた山山が隱見して、西南の端近く高塔の聳え立つやうな槍ケ嶽の大槍が、すぐわが眼の前に、天を衝かうと

してゐた。私は、山上の月夜を見ようとする宿願の、遂にかなへられたことを喜んだ。この怪しく明暗の隈の入亂れた月光の中に肅然として立ち、一萬一千尺の峻峯と之を掠めて徂徠する雲とに對する心持は、實に何とも言へなかつた。

この嬉しさを、まだ寢てゐる人達とも分ちたかつたので、再び小屋に這入つて、寢てゐる人達に知らせた。皆起きて來て、月の光を浴びて眺めた。併し何分にも寒いので、間もなく小屋に歸り、榾火を盛にして話し合つてゐた。やがて曉が近づいて來た。東が次第に

(一) 東方遠く上野國との境にある活火山。標高二五四二米。
(二) 北方遠く越後との國境に聳ゆ。標高一九一一米。
(三) 信濃鐵道の一驛。
(四) 信濃富士とも稱せられ、中房の近くにあり。標高二二一〇米。
(五) 槍ケ嶽に連なりてその南に在り、山容の豪壯、登攀の難を以て著名なり。標高約三一〇〇米。

白んで來て、丁度そちらに向いてゐる硝子窓にほのかな色がさして來る。外に出て見ると、淺間(一)の左、戸隱(二)の右、名を知らぬ山の峯とすれずれに帶をひいてゐる雲の間から、旭が將に出ようとしてゐるところであつた。有明(三)から中房へ登る途中、あんなにも仰ぎ見て來た有明山(四)の嚴然として沈默した峯も、今は脚底に低く黝然として見えるに過ぎない。

振返つて西の方を見れば、昨夜の浮雲は悉く消えて、大天井・東天井の峯續きと、燕嶽の絶頂とを兩端の框(わく)とした前景の中に、南は豪壯な穗高(五)から北は巍巍

たる立山(一)まで、槍ケ嶽や、東鎌尾根(二)・西鎌尾根(三)や、双六(四)や、三股蓮華や、三ッ嶽(六)などの諸峯が塡(は)めこまれて、溪谷から始まつて巓まで、複雜な襞を刻んだ全山容を露出しつつ、すぐ眼の前に、一萬尺の峻峯を立て列ねて居る。さうして實に千仞の谷底、高瀨(七)川の溪流の音が、耳を澄ませば幽玄に響いて來る。小鳥の囀る聲さへ此の世のものとは思はれない。

私達がこの大觀に見とれて、前を見たり後を眺めたりして居る間に、太陽は黑雲との戰に打勝つて、その眩しい姿を現して來た。さうしてその最初の光が

(一) 北日本アルプス中最も壯大なる山。標高約三〇〇〇米。
(二)(三) 槍ケ嶽の東と西とに續く尾根にして、縱走に困難なる處。全くその稜線は鎌の刃の如し。
(四) 槍ケ嶽の西北に聳ゆ、標高二八六〇米。
(五) 双六嶽の北方に連なる。標高二八四一米。
(六) 燕嶽の西方に高瀨の大溪谷を隔てて聳ゆ。標高二八四四米。
(七) その源を槍ケ嶽に發し、燕嶽と三ッ嶽との間を流れて、大町附近にて鹿島川を合せ、松本附近に至りて犀川に合す。

脚下に投げられた時、この大きく峻しい紫に輝く北アルプス主脈を背景として、何といふ可憐な光景が其處に展開されたことだつたらう。今までは陰にゐて目立たなかつた高山植物の花が、宿つてゐる露と、ともに忽ち輝いて來た。私は此處にも亦、高山の上にある特殊の淸らかな愛らしさを發見して、嬉しさに堪へなかつた。

併しこんなに爽快に晴れたのも、辛うじて早朝の一時間餘であつた。最初に槍の穗先を照してゐた太陽の光が、次第に這下つて、周圍の諸峯の巓にも及び

始める頃には、何處から湧出るともなしに、一面に谷を埋めた霧が、次第次第に擴がつて、はては咫尺を辨ずる事さへ出來なくなつた。灰色の濃霧の流れる中を、花崗岩の小砂が清淨に敷きつめられてゐる斜面を辿つて、燕嶽の絶頂に登らうとすると、怪異な姿をして立つ巖石が、處處に其の影を濃く淡く見せるのであつた。（阿部次郎の「北郊雜記」に據る）

二一　暑中休暇　上

今年の夏は、自分が病氣で、出かける事が出來なかつたばかりでなく、二人の男の子も健康に故障があつて、旅行は望ましくなかつたので、到頭、誰も何處へも行かない事にきめた。その代り、子供達には銘銘に希望する本とか玩具とかを買はせる事にした。

年上の方の子供達は書籍を買つた。近頃繪に興味を感じて來た末から二番目の八重子は、水彩繪の具と筆とを買つて、規定の金額は一度に使つて了つた。末の冬子は線香花火や千代紙や細細（こまごま）した品を少しづつしか買はないので、配當された僅な金額も、餘程長く使ひでがあるやうであつた。

學校へ行つて居る子供達は、毎朝復習をして居た。まだ幼稚園の冬子は、その時間中は相手になる人がないので、仲間外れのわびしさを感じて居るらしかつた。それで冬子も祖母の膝の前へ繪雜誌などを擴げて、やはり一種の復習をして居る事もあつた。

此の四五月頃から、毎日父親が繪を描いて居たのが子供達に影響して、皆が熱心な自由畫家になつて了つた。誰の發案だか、小さな繪の雜誌を拵へた。五人の子供達が銘銘に人に見せずに描いたのを、長女が纏めて綴つてから、發表する事にして居た。「あをぞら」

といふ名前をつけて、一週間に少くも一回位づつ發行したのが、存外持續して、最近には第六號が發行されたやうである。表紙畫は順番で受持つ事になつて居るらしい。

出品畫を描いて居る内は、ひどく人の見るのを厭がつて、皆、方方の部屋の隅へ頭をつつこんで描いて居た。時時、兄さん達が無理に覗きに來ていけないといふ訴が、小さい子等から母や祖母の前に提出されて居るやうであつた。

五人の描く繪が、五人ながら、それぞれの小さな個

性を表現して居るのが相當に目立つて見えた。のみならず、銘銘にもう既にきまつた一種の型のやうなものが芽を出しかけて居るのであつた。何と言つても、一番多くの獨創的な點をもつて居るのは、一番小さい冬子の自由畫であつた。が、その面白い點が一度認められ褒められると、それがもう十八番になつて、例へば富士山が出だすと、それが如何なる繪にでも必ず現れるのであつた。今度は趣向を變へて、新しいのを描かうといふやうな氣は、流石にまだ無かつた。

又時には「あをぞら」文章號といふのが發行された。

私が讀書して居る隣の室で、八重子と次男とがひそひそ話し合つては、次男が何か半紙へ書いて居ると思つたら、それは八重子作の御伽噺を筆記して居るのであつた。出來上つた雜誌を見ると、隨分色色の文章や歌があつた。長男のは感想的のもので、同人の繪や文章の傾向が論じてあつたりした。八重子の日記には「おやつ」や「おかず」の事が大分詳しく書いてあつた。冬子のも「ホシ」と題した歌のやうな物があつたが、之は意味がどうしても分らなかつた。

二二　暑中休暇　下

子供達がこんな事をして、割合に仲好く遊んで居る内に、夏休は容赦もなく經つて行つた。もう幾つ寢ると學校や幼稚園が始まるかといふ事が、幼い子供達によつて毎日繰返されるやうになつた。さう思つて見るせゐか、子供達の顏にも、何處かに無聊の影が浮んで來た。

或夕方、一同が涼臺と緣側とに集まつて、色色な話をして居る間に、去年皆で或夜銀座(一)へ行つて、アイスクリーム(二)を食べた時の話が出た。それを聞くと、女の

(一) 東京市京橋區に在り。
(二) Ice-cream.

子達が「今年も銀座へ連れて行つて。」と言出した。

翌日の夕方は空も快く晴れ、驟雨の心配も無ささうであるし、風も涼しくて、そぞろあるきには適當であつたから、妻に五人の子供を連れさせて、銀座へ遊びにやつた。末の二人は、どんな好い處へ行くのかと思はれるやうに喜んで、自分達の好みで學校通ひの洋服を着せて貰つて、一時間も前から靴を穿いて勇んで飛廻つて居た。

子供達が出て行つた後で、私は涼臺の上で、母と唯二人で話し合つて居た。座敷の電燈も大方消して了

つたので、庭は暗かつた。家中が珍しくしんとして、庭の邊で蟲の鳴くのが流れるやうに聞えた。

十時頃になつて、門の戸があいて、皆がどやどやと歸つて來た。どうしたのか、冬子が泣きながら這入つて來て、着物を着更へて床へ這入つても、まだしくしく泣いて居た。どうしたのかと聞いて見ても、何も言はないし、外の者にも何故だか分らなかつた。

銀座を歩いて夜店をひやかして居る内に、冬子が「どうして早く銀座へ行かないの。」と、何遍も聞いたさうである。此處が銀座だと説明しても分らなかつた。

どうも、銀座といふのはアイスクリームのある家の事と思つて居たらしいといふ事である。それでも宅の門までは元氣よく歸つて來たのだが、門を這入ると、いきなり泣出したのださうである。

私は「珍しく繁華な街へ行つたから、興奮したのだらう。」と言つた。私がこれを言ふと同時に、冬子は急に泣止んだ。そして何か考へてでも居るやうな風であつたが、間もなくすやすや寢入つて了つた。

かうして遂に夏休も今に終らうとして居る。不幸にして今年は何處へも連れて行かなかつたが、却て

二人の男の子の健康も全く恢復したし、家族打揃つて、暑さの中で愉快な生活を續けて來た。やがて始まる學校に、勇んで出かけてゆく子供達の姿を眺める日を、私は樂しみにして居る。（『冬彦集』に據る）

二三　地震の日

*あの日、私は朝餐をすませてから、すぐ書齋に這入つて、昨夜書殘した急を要する原稿を書繼ぎました。十時過に漸く纏まつたので、速達にして送らうと、自身で持つて、近くの郵便局へ出かけました。風は少し

*大正十二年九月一日。

あつたが、天氣は好く、氣持の爽かな朝だつたやうに覺えてゐます。

その歸途、行きつけの理髮屋の前まで來ますと、其の家の職人の一人が挨拶しました。この男は私の詩の愛讀者なのです。そこで、私は自分の頭髮が伸びすぎて居たことを想ひだして、其處へ立寄りました。三十分ほど新聞を讀みながら自分の番を待つて、やつと頭のうしろを半分ほど刈つて貰つたと思ふ頃、がたがたと震動がやつて來ました。なに、大した事はあるまいと椅子に落着いて居ると、益〻猛烈に震動して、

其處らに置いてある道具が、轉倒しました。すると、刈つてゐた職人が、「あぶない。」と怒鳴つて、抱へるやうにして戸外へ連れだしてくれました。見ると、十字路の兩側の家の屋根が浪のやうに搖れてゐます。前の氷屋の緣臺の下には、既に同じ理髮屋の若い職人が三人もぐり込んでゐて、「さあ此處へお這入んなさい。」と頻に勸めます。

けれども、どんなに激しく搖れても、氷屋の緣臺の下などには這入りたくないと思つて、力めて倒れぬやうにして、街道の眞中に立つて居るうち、ふと胸に

浮んだのは家族のことでした。妻は入院中であり、家には眼の不自由な母と二人の女の兒とがゐるきりである。尤も女中が二人居るけれども、年上の女中はどうやら使に行つて不在だつたやうにも思ふ。さう思ふと、自身よりは家の方が心配になつて、ちよつと震動がしづまつたのを幸に、家の方へ駈出しました。さうして五六間も駈けて來ると、第二の、あの最も劇烈だつた震動が起つて、私ははつと思ふ間に、足をとられ、往來へ投倒されました。と、その途端に、屋根から落ちて來た瓦に、したたか背中を打たれました。

併しすぐ跳起きて、黄色な塵埃の朦朦と立ちこめてゐる中を、夢中で家まで駈けつけました。さうして門を潜るなり、大聲で喚きました。が、一向に返事がありません。胸を轟かせて飛びこむと、裏庭の井戸端にさしかけたトタン(一)屋根の柱に、二人の女中が各一人づつ女の兒を背負つて、その上に二人で母を庇ひながら、かぢりついてゐました。私の顔を見ると、大きい方の女中は、我慢してゐた感情が一時に破裂したと見えて、聲を立てて泣きだしました。

この騒動の中で、今思ひ出しても可笑しいのは、私

(一) 亞鉛板のこと。

が周章てて理髪屋を駈出したので、首のまはりに例の白いエプロン(二)を巻付けたなりで家へ歸つたことです。若しも私が途中で大怪我をするか、又は死にでもしたら、どんなでしたらう。それに頭髪はまだ刈りかけた儘なのです。

やがて、理髪屋の深切な職人が、私の身を案じて追ひかけて來てくれたのを幸に、忙しい中を賴んで、直に自轉車で病院まで見舞に行つて貰ひました。仕合せのことに、妻も無事に避難してゐた事が知れました。（西條八十の文に據る）

(二) Apron. 前垂。

二四　芙蓉の花

おそろしきなるも去りたり
靜なるわが家の庭に
今日も咲く芙蓉の花よ

わが兒等は何時もの如く
おりたちて砂ほり遊ぶ
今日のみは嗚呼わが兒等よ

その赤き鋤ををさめよ
おそろしきなると焔とに
あまた世の幼兒どもは
親の手に抱かれつ失せぬ

その小さき鋤を見るだに
あはれなる葬(はふり)を偲ぶ
わが胸はいま痛むなり

今日のみは嗚呼わが兒等よ
つつましく傍に坐して
亡き友のために祈れよ

あはれ幸うすきその魂ぞ
かの白き芙蓉のごとく
うるはしく穢なかりし（西條八十―噫東京）

二五　リンカーンの少年時代上

完全無缺の人物は、古往今來、決してありません。け

れども完全に近い人物を求めたならば、アブラハムリンカーン*の如きは實にその一人でありませう。英雄豪傑は必ずしも得難くはありませんが、完全に近い人物は眞に稀有なものであります。

リンカーンは北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その德は萬世に輝き、その澤は四海に溢るる人であります。私は今この大人物の少年時代の話をして、いささか追慕の意を表したいと思ひます。

斯かる大人物も、其の生れは極めて賤しく、生れた

* Abraham Lincoln.
(1809—1865)

(一) Kentucky.
(二) Hardin.
(三) Nolin.

處さへ、唯、(一)ケンタッキー州中、當時(二)ハルディンと稱へた片田舎のノー(三)リン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても殘つてゐません。彼の兩親は極めて貧しく、家と稱するほどの住居もなく、丸木の小屋に住んで居りました。この丸木小屋こそは、實に千古の大人物アブラハムーリンカーンが呱呱の聲を擧げた處であります。時は西暦一千八百九年二月十二日、春雪正に溶けて梅花綻ぶる時節の事であります。

父は憐むべき日雇で、日日、他人の田圃に勞役し、母は炊事・裁縫一切の家事を勤める外に、他家へ洗濯に

雇はれたり、近傍の森や林で薪を拾つたりして、その日その日のかすかな煙を立てて居りました。七歳の時から、リンカーンは父に隨つて森に行つては、小さい腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出ては、鍬を執つて耕作の手助をもして、十年あまり、寸毫の暇もなく、營營として勞働を續けました。

斯かる貧苦の間にも、常に彼を教へ、彼を勵まして、他日、大成すべき基を作つた人がありました。それは誰でもありません、彼の母親でありました。この母親は素性の賤しきに似ず、至つて賢明な婦人で、人間の

價値は、その身の貧富・貴賤によつて定まるのではなく、その精神の如何によるものである事を常に敎へてゐました。そして「御身を學校に入れて學問をさせたいは山山であるが、今の貧乏ではそれもかなはぬ。せめては母が覺えた一通りを敎へる程に、農事の暇に精出して勉强せよ。」と懇に言ひきかせて、第一に習字、次に讀方を敎へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては敎へましたが、不幸にも、リンカーンが十歳の時、朝露に先だつて、脆くもあへなくなりました。彼は天を仰ぎ地に俯して歎き悲しみましたが、

今は致方もないので、父とともに泣く泣く野邊の送を營みました。

リンカーン

父はもとより、日日の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは、暗夜に燈火を失つた心地。「せめて一年・半年なりとも小學校に通ひたい。」と切に父に訴へましたので、父も餘りの不憫さに、遂に之を許しました。リンカーンは天にも昇る心地で、日日、九英里餘の路を厭はず、一回の缺席もせずに、田舍の

一小學校に通ひましたが、哀にも赤貧の爲に、僅、九個月にして廢學せねばならぬ事になりました。嗚呼、この九個月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體であります。

これより彼はまた、日日、鍬を執つて田圃に働く身となりましたが、或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に一二の書卷を携へてゐました。その書は綴字書・算術書・文法書の三種の中に限られてゐました。彼の天性の怜悧なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇暇に、露天の下で、教師もなくて、よくその意義を理會する事が出來たのであります。斯くて、朝には此等の書を携へて出で、また夕には携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、この三書を一章一句も殘さず悉く諳記するに至りました。

二六　リンカーンの少年時代下

十三四歳の頃、かねて其の名を聞いて其の功業を敬慕せるジョージ・ウォシントン*の傳記を、彼の隣人が藏することを知り、讀みたいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがして居ましたが、一日、遂に

* George Washington.
(1712—1790)

思ひ切つてその借覽を請ひました。幸に其の人は快く貸してくれました。リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家に歸り、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にもその夜暴風雨があつて、彼が爲に一大事が起りました。彼が驚き覺めて、借りた本のことを思ひ出し、濡してはいけと、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、ひどくいたんで居ますので、大聲あげて泣きました。小兒心に心配して、その夜は終夜眠られません。翌朝、兎や角と案じましたが、正直に次第を述べて

罪を謝する外はありませんので、濡れ破れてページ*も分らぬ書を持つて隣家に行き、よくおわびをして、「其の代りに、二日でも三日でも勞役をさせて下さい。」と賴みましたので、貸主もその心を察して、別段に之を尤めず、その意に任せました。そこで彼はウォシントン傳を携へて家に歸り、濡れたページを丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀しました。以來、讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂には之を體得するに至りました。

又彼が一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅

* Page.

客がその家に宿つたことがあります。その旅客が深更に厠に行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて燈火の光がさして居ります。不思議な事と、竊に行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長屋で、一人の少年が一心不亂に書見をして居ました。旅客はこの意外な光景にひどく驚いたが、その夜はその儘わが室に歸り、翌朝、家の主人にこの事を尋ねました所が、主人も「彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を讀み、夜も夜業が終れば更くるまで勉強し、分らぬ事があれば人に質し、學問を此の上なき樂しみとしてゐる。しかも溫順で謙遜で、正直によく働いて、才智もあれば、情愛もある、實に末賴もしい少年である。」と答へたといふ事であります。この少年こそ、言ふまでもなくリンカーン其の人でありました。

諸君は、我が國の近世の偉人、二宮尊德の少年時代の勉學の狀を聞いて居られませう。貧家に育つても、よく勉强の功を積んで大成せる、東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす。リンカーンが、他日、大統領となり、世界の大偉人として萬人に仰がれるに至つたのも、

實に此の少年時代に、貧窮の經驗から得た教訓の賜であると思はれます。（「アブラハムーリンカーン」に據る）

二七　故郷

我が故郷は九州のほぼ眞中で、海に遠い地方、幅一里、長さ三里といふ、もつさうの底見たやうな谷が我が搖籃である。どちらを向いても雜木山がぐるりと屏風を立て廻し、その上から、春は青くなり、冬は白くなる遠山がちよいちよい顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立して居る高鞍山で、誰が天邊に乘りすてたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかかる。この山が見え出すと、どんなに降つて居ても、やがては霽れる。雲がかかるのも日が射すのも、先づこの山が第一で、いはば我が故郷の氣象臺だ。四方の山から滾滾と湧出る清水は相集まつて、村人のいはゆる大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、その田を無理に押しのけて、此處に村が一撮み、彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠の里といつて、まづこの谷の都で、町といへば町、戸數は千にも足らない。

取出していふ程でもないが、今も忘れ難く思ふのは、水の清さと稻の美しさとである。たしか東京に積出して鮨米にするさうな。その稻葉のつやつやと青んで、のびのびと立揃つたところは、都の人に見せもしたい。實に見せたい、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、早乙女の白手拭がひらりひらりと風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れるころの賑かさを。それから炎天の田の草取は傍で見てもつらいが、併し夕方「暑い、堪らぬ。」といふ下から、ごろごろ鳴りだす。突然大氣が冷える。ふと見ると、黑雲がもう高鞍山を七分

通り呑んで居る。それが*インキの浸みだすやうに、ずうつと滿天にひろがつて來る。稻妻がぴかり、夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風がさつと吹いて來ると、軈て大粒の雨がぽつり。耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃延びぬうちに、光る、鳴る、降る、吹く、世の終かと思ふ程の荒れやう。と思へば、忽ちすうつと明るくなる。笠おつ取つて出て見る頃は、夕立は最早五六町逃延びて、隣村はさながら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つて、東の方はまだ眞暗。雷樣がごろごろ太鼓を敲いて居るが、西の方はあかあかと夕日がさして、

* Ink.

高鞍山の天邊と思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。嗚呼、涼しい。御覽なさい、先程まで萎えしをれて居つた稻が、たつた一瞬の間に、眼も醒めるほど青青となつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見ても、ざわざわとさざめいては露を搖りこぼして居る。濁り泡だつ田の水はどくどく溢れて、小鮒や鰌がやたらに畦路を跳ねて居る。

蟲送も濟んで、初秋の風そよそよと稻葉に音づれる頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻の花の美しさ。二百十日・二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊

敷いた谷間がいつしか金色に照つて、此處にもざわざわ、其處にもざくざく。收穫のさかりになれば、誰を訪ねても家には居ない。皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで籾ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先程まで田にあつた稻が、もはや綺麗な米俵になつて、倉や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓打つて豐年を祝ふのである。

それから水、嗚呼、あんな水が縱横に市中を流れて居たら、東京もどんなによからう。我が故郷では殆ど井戸の用なしと言つてもよい位、四方の山から滾滾

として絶えず湧出る清水は、縦横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落合ふ。何處に行つても潺潺淙淙の音が聞える。夏の月夜など、ぢつと聞いて居ると實に好い。京都は水がよいといふが、自分は京都のよりもよいと思ふ。馬が飲む路傍の小溝の水も、女が洗濯する家の前の流も、水車が搔きまぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄んで居る。今でも、夏になると、自分は一入、故郷を偲ぶのである。（徳富蘆花―思出の記）

二八　生存競爭

（イキナガラヘントル　多ノ競爭）

地球上には各種の動植物をして自由に繁殖せしむべき餘地は少しもない。そこへ各種の動植物が多數の子を生むのであるから、互の間に劇烈な競爭の起るのは見易い道理ではあるが、その有樣を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する狀態から考へてかからなければならぬ。

動物の中には、獅子・虎・狐・狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子・虎等の餌となるのは、やはり草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は、直接にか間接にか、必ず植物より取る

外はない。又海産の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな工合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、この場合にも動物の食物の原料は、やはり植物界にあるのである。

かくの如き狀態ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物なしには肉食動物は生きて

居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犧牲に供する積りでなければならず、又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から日日若干の動物を殺す覺悟でゐなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出來難いことである。

又長閑な春の日に、野外を散歩して見ると、草木の

青青と茂り、花の美しく咲いて居る處を、蝶が面白さうに飛廻り、小鳥が樂しさうに歌つて居る。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、ともに此の世の樂しさを褒めたたへるが、それだけが實相ではない。少し丁寧に觀察して見れば、世の中は決してそんな無事平穩なものではない。鳥がかく歌つて居られるのは、今日までに數十萬の蟲を食殺した結果で、歌ひながらも、尙、蟲の命を取らうと探して居る。また、蝶がかく舞つて居られるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食枯した結果である。さうして彼處の樹の枝には、蝶

を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、又此處の樹の項上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、少しでも油斷すれば忽ち食殺されて了ふのである。なかなか氣樂に遊んでばかりは居られぬ。動植物は總てかくの如く相殺し相食うて、それで自然界の平均を保つてゐるのである。

斯かる處へ、年年歲歲、動植物の各種が夥しく子を產むのであるから、その多數は、無論他の動物のため

に餌として食殺され、若し生殘つたものも、餌を得る爲に甚しく相爭はなければならぬ。動植物の繁殖力は實際無限であるが、それは、代代產れる子が悉く生存し繁殖するものと假定した上の事であつて、現在の如く、產れる側から、他の動物にその大部分を食はれてしまふ場合には、もとより著しい增殖の出來る筈がない。なほその上に、一地方における各種の動物の食物の總量には、おのづから制限があつて、生殘つたものが、皆わが望むままに食ふといふことは到底出來難い。假に、兎が一匹居るのを、犬が二匹で見付けたとしたならば、先に兎を捕へた犬だけは飽食し、後れた方は餓ゑねばならぬ譯ゆゑ、如何なる動物も食ふための競爭は免れぬ。又兎の二匹ゐる所へ、犬が一匹來れば、速く逃げた兎は生殘り、遲い方は食はれてしまふ譯ゆゑ、大抵の動物は、食はれぬための競爭も避けることが出來ぬ。動植物ともに、各自皆食ふやうに、食はれぬやうに、殺すやうに、殺されぬやうにと競爭して居るのが實際の狀態で、これを生存競爭といふのである。（丘淺次郎―進化論講話）

二九　伊能忠敬

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家を其の子景敬に讓るまで、自ら抑へて平平凡凡の人となり、一意專心、ただ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に最も美はしく果さん事を期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざる事には一擧手・一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、その爲さざるべからざる事

※忠敬が生家は神保氏にして上總國武射郡小堤村にありしが、養家は下總國香取郡佐原町にして、その墓は佐原町に在り。

なる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へてわが爲すべき事をなすは、その人啻に才氣あるのみならず、又實に德量ある人なりといふべし。

世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は鮮し。年若くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。物を截る事はよくすべし、折るる恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡しがたし。

忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且つ之を能くすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能

氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ。景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふる事を得べし。この時は忠敬

年既に五十歳、常人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり。有爲の人には、如何なる場合もおのが力を試むべき處たり。

伊能忠敬

忠敬は、常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、然る後に漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者よ、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずる

こと勿れ。

さるほどに、忠敬はその鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に笈を負ひて鄕關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、唯その若きと老いたるとの差のみ。

かくして、忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが滿足し信仰すべき師を得るは容易ならざりき。折から幕府には曆法改正の擧ありて、これがた

め特に大阪より高橋作左衞門といふ者を召されたり。作左衞門、東岡と號す。算數、曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直に師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歲にして、東岡は三十二歲なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、假令、己が學業などその人に及ばずとも、猶强ひて自ら高ぶり、敢て頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、爭でか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びてそれが門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟

子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄となしたりとぞ。

晩學の難きは、實に何れの世にありても、斯かる事實の存するがためなり。是を以て非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて學ぶは偶、その志の淺からざるを顯すのみ。また何の不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區區たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、ただ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かかれば、忠敬と同門學生との優

劣勝敗は比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

かくて、忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齡なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、卽日にも出發せんとす

る勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志す所を完成したりしは、一にこの元氣勃勃として燃ゆるが如き心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりと言ふ。是、我に伊能忠敬あるを知らざる者の放言のみ。（幸田露伴―露伴叢書）

三〇　吾輩は猫である　上

春の日は昨日の如く暮れて、折折の風に誘はれる花吹雪が、臺處の腰障子の破れから飛込んで、手桶の

中に浮ぶ影が薄暗い勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ鼠をひつ捕へて、家中を驚かしてやらうと決心した吾輩は、豫め戰場を見廻つて、地形を呑込んで置く必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈がない。疊敷にしたら四疊敷もあらうか。その一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋、八百屋の御用を聞く土間である。土竈（へつつひ）は貧乏勝手に似合はぬ立派な物で、赤の銅壺がぴかぴかして、後は羽目板の間を二尺殘して、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は膳、椀、皿、小鉢を入れる戸棚となつて、狹き臺處

をいとど狹く仕切つて、横に差出すむき出しの棚と、すれすれの高さになつて居る。その下に摺鉢が仰向けに置かれて、摺鉢の中には、小桶が尻を吾輩の方に向けて居る。大根卸・摺小木が並んで懸けてある傍に、火消壺だけが悄然と控へて居る。眞黑になつた垂木の交叉した眞中から一本の自在鉤を下して、先には平たい大きな籠がかけてある。その籠が、時時、風に搖れて鷹揚に動いて居る。この籠は何の爲に吊すのか、この家へ來たてには一向要領を得なかつたが、吾輩の手の屆かないやうに、態と食物を此處へ入れると

云ふ事を知つてから、人間の意地の惡さをしみじみ感じた。

これから作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかといへば、無論、鼠の出る處でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからと言つて、一人で待構へて居ては、てんで戰爭にならぬ。是に於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から來るかなと、臺處の眞中に立つて四方を見廻す。下女は、先刻、湯に行つたきり、まだ戻つて來ない。子供達は疾くに寢て居る。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。時時、門前を車が

通るが、通り過ぎた後は一段と淋しい。わが決心といひ、わが意氣といひ、臺處の光景といひ、四邊の寂寞といひ、全體の感じが悉く悲壯である。

かういふ境界に入ると、物凄い内に一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから、何疋來ても恐くはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都合だ。周密なる觀察から得た材料を綜合して見ると、鼠族の逸出するのには二つの行路がある。彼等が若し泥溝鼠であるならば、土管の中を通つて、流しから土竈の裏手へ廻るに相違ない。その時は、火消壺の陰に隱れてゐて、退路を絶つてやる。或は溝へ湯を拔く漆喰の穴から、風呂場を迂回して、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上に陣取つてゐて、眼の下に來た時、上から飛下りて一攫みにする。

それからと、また四邊を見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に喰破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻を附けて嗅いで見ると、少少、鼠臭い。若し此處から吶喊して出たら、柱を楯に遣過して置い

て、横合からあつと爪をかける。若し天井から來たらと上を仰ぐと、眞黑な煤がランプの光で輝いてゐるばかり、一寸、吾輩の手際では上る事も下る事も出來ぬ。まさか、あんな高い處から落ちてくる事もなからうと、此の方面だけは警戒を解く事にする。それにしても、三方から攻撃される懸念がある。一方なら片眼でも退治して見せる。二方なら何うにか斯うにか遣つて退ける自信がある。併し三方となると、如何に本能的に鼠を捕るべく豫期せられる吾輩も、手の着けやうがない。どうしたら好からう。

どうしたら好からうと考へて、好い智慧が出ないときは、そんな事は起る筈はないと決めるのが、一番安心を得る近道である。又、法のつかないものは起らないと考へたくなるものである。まづ世間を見渡して見給へ。地球上、何處でも、何時天災が起らぬとも限らぬではないか。併し人間は始終さう心配らしい顏をしては居ない。心配せぬのは心配する價値がないからではない。幾ら心配したつて法が付かぬからである。吾輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする

方が安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。因つて三面攻撃は起らぬと決める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云ふ理由かと段段考へて見ると、漸く分つた。三個の計略のうち、何れを選んだのが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる解決を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩之に應ずる策がある。風呂場から現れる時にも、之に對する謀がある。又流しから這上る時にも、之を迎へる成算がある。が、其の中どれか一つに決めねばならぬとなると、大いに當惑する。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらして居ると、突然、破れた腰障子が開いて、女中の顔がぬうと出る。顔だけ出ると言ふのは、手足がないといふ譯ではない。ほかの部分は夜目で能く見えぬのに、顔だけが著しく強い色をして、判然、眸底に落ちるからである。女中は昨夜の泥坊に懲りてか、早くから勝手の戸締りをする。書齋で主人が「俺のスティック*を枕頭へ出して置け。」と命ずる聲が聞える。何の爲に枕頭にステッ

* Stick. 此の英語の轉訛。

キを飾るのか、吾輩には分らなかつた。

夜はまだ淺い。鼠はなかなか出さうにない。吾輩は大戰の前に一休養を要する。

三一　吾輩は猫である下

この家は勝手には引窓がない。座敷なら欄間といふやうな處が、幅一尺ほど切拔かれて、夏冬吹通しに引窓の代理を勤めて居る。惜氣もなく散る彼岸櫻を誘うて、颯と吹込む冷冷した風に驚いて眼を覺すと、二十日の月さへ何時の間にか出て、土竈の影は斜に

揚板の上にかかる。寢過したのではないかと、二三度耳を振つて家内の樣子を窺ふと、しんとして昨夜の如く柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこから出るだらう。

戸棚の中でことと音がしだす。小皿の緣を足で抑へて、中を荒して居るらしい。此處から出るわいと穴の横へすくんで待つて居る。なかなか出て來る氣色はない。皿の音はやがて止んだが、今度は丼か何かにかかつたらしい。重い音が時時ごとごとする。しかも、戸を隔てて、すぐ向側でやつて居る。吾輩の鼻

づらと、距離にしたら三寸とも離れて居らぬ。時時は、ちよろちよろと穴の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔を出す奴はない。戸一枚向うに、現在、敵が暴行を逞しくしてゐるのに、吾輩はぢつと穴の出口で待つて居らねばならぬ。隨分、氣の長い話だ。鼠は皿小鉢の中で盛に舞蹈會でも催して居るらしい。

今度は、土竈の陰で吾輩の鮑貝がことりと鳴る。敵は此の方面へも來たなと、そうつと忍び足で近寄ると、手桶の間から尻尾がちらと見えたきり、流しの下へ隱れて了つた。暫くすると、風呂場で嗽茶碗が金盥

にかちりと當る。今度は後方だと振向く途端に、五寸近くある大きな奴が、ひらりと齒磨粉の袋を落して緣の下へ駈込む。逃すものかと續いて飛下りたら、もう影も形も見えぬ。鼠を捕るのは、思つたより困難なものだ。吾輩は先天的に鼠を捕る能力がないのかも知れぬ。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から駈出し、戸棚を警戒すると、流しから飛上り、臺處の眞中に頑張つて居ると、三方面とも少少づつ騷ぎ立てる。小癪と言はうか、卑怯と言はうか、到底、彼等は君子の敵でない。

吾輩は、十五六回もあちらこちらと、氣を疲らし心を勞らして奔走努力して見たが、遂に一度も成功しない。殘念ではあるが、斯かる小人を敵にしては、流石の吾輩も施すべき策がない。

最初は勇氣もあり、敵愾心もあり、悲壯といふ崇高な美感さへあつたが、遂には面倒と馬鹿氣て居るのと、睡眠を催すのと疲れたのとで、臺處の眞中に坐つたなり、動かない事になつた。併し動かないでも、八方睨みを極込んで居れば、敵は小人だから大した事は出來ぬのである。目ざす敵と思つた奴が、存外つまらぬ者だと、戰爭が名譽だといふ感じが消えて、憎いといふ念だけ殘る。憎いといふ念を通り過すと、張合が拔けてぼうとする。ぼうとした後は、「勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出來ないのだから。」と輕蔑の極、睡くなる。吾輩は、以上の經路を辿つて、遂に睡くなつた。吾輩は睡る。休養は敵前に在つても必要である。

開いたままの引窓から、復、花吹雪を一塊投込んで、烈しい風の吾を遶ると思へば、戸棚の口から彈丸の如く飛出した者が、避くる間もあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰ひつく。之に續く黑い影は、後に

廻るかと思ふ間もなく、吾輩の尻尾へぶら下る。瞬く間の出來事である。吾輩は何の目的もなく器械的に跳上る。滿身の力を毛穴に込めて、この怪物を振落さうとする。耳に喰下つたのは中心を失つて、だらりと吾輩の横顔に懸る。護謨管の如き柔かい尻尾の先が思ひがけなく吾輩の口に入る。屈竟の手懸りに、碎けよとばかり尾を銜へながら左右に振ると、尾のみは前齒の間に殘つて、胴體は古新聞を貼つた壁に當つて、揚板の上に跳返る。起きあがる所をすかさず乘りかかれば、毬を蹴つたる如く、吾輩の鼻づらを掠めて、

鈎段の緣に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上げる。距離は五尺。その中に月の光が、大幅の帶を空に張る如く、横に差込む。

吾輩は前足に力を込めて、やつとばかり、棚の上に飛上らうとした。前足だけは首尾よく棚の緣に懸つたが、後足は宙にもがいて居る。尻尾には最前の黑い物が、死ぬとも離るまじき勢で喰下つて居る。吾輩は危い。前足を懸けかへて、足懸りを深くしようとする。懸けかへる度に、尻尾の重みで淺くなる。二三分滑れ

ば落ちねばならぬ。吾輩は愈危い。棚板を爪で搔きむしる音ががりがりと聞える。これではならぬと左の前足を拔換へる拍子に、爪を見事にかけ損じたので、吾輩は右の爪一本で棚からぶら下つた。自分と尻尾に喰ひつくものとの重みで、吾輩のからだがぎりぎりと廻る。この時まで、身動きもせずに覘をつけて居た棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目がけて、棚の上から石を投げるが如く飛下りる。吾輩の爪は一縷のかかりを失ふ。三つの塊が一つとなつて、月の光を竪に切つて下へ落ちる。次の段に乘せてあつた摺

鉢と、摺鉢の中の小桶と、*ジャムの空罐とが、同じく一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上に轉がり出す。凡てが深夜に啻ならぬ物音を立てて、死物狂の吾輩の魂をさへ寒からしめた。

「泥坊」と主人は胴間聲を張上げて、寢室から飛出して來る。見ると、片手にはランプを提げ、片手にはステッキを持つて、寢ぼけ眼からは身分相應の烱烱たる光を放つて居る。吾輩は鮑貝の傍に大人しく蹲踞(うづくま)る。二疋の怪物は戸棚の中へ姿を隱す。主人は手持無沙

* Jam.

汝に、「何だ、誰だ、大きな音をさせたのは。」と怒氣を含んで、相手も居ないのに聞いて居る。月が西に傾いたので、白い光の一帶は半切程に細くなつた。（夏目漱石）

新訂新撰國語讀本　卷一　終

大一年四十二月十二日　文部省檢定濟　中國學校用科語

大正十三年十月二十四日印刷
大正十三年十月二十七日發行
大正十四年一月十七日訂正印刷
大正十四年一月二十日訂正發行

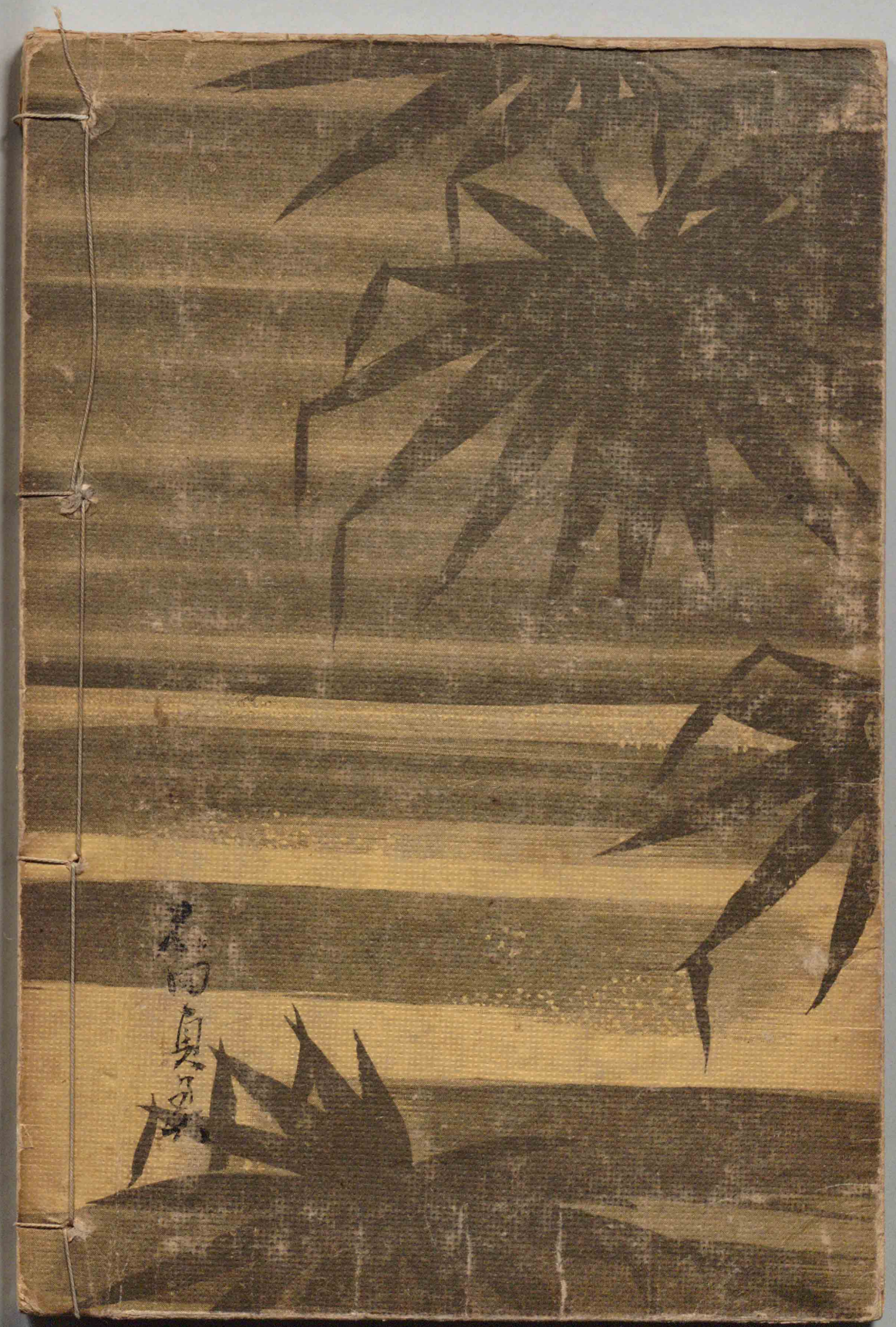
新訂新撰國語讀本（全十冊）

定價
卷一、二、各金四拾壹錢
卷三、四、五、六、各金參拾七錢
卷七、八、九、十、各金參拾參錢

大正十年度臨時定價
卷一、二、各金七拾錢
卷三、四、五、六、各金六拾參錢
卷七、八、九、十、各金五拾六錢

編者　佐々政一
補修者　大町芳衛
補修者　武島又次郎
補修者　杉敏介

發行兼印刷者　東京市神田區錦町一丁目十番地　株式會社明治書院
取締役社長　鈴木友三郎

發行所　東京市神田區錦町一丁目（振替口座東京四九九一番）　株式會社明治書院　電話神田（25）一四一四番

不許複製